村の一年

一

都近い此邊の村では、陽暦陰暦を折衷して一月晩れで年中行事をやる。陽暦正月は村役場の正月、小學校の正月である。いさゝか神樂の心得ある若者連が、松の內の賑合を見物かたゞ〳〵東京に獅子舞に出かけたり、甲州街道を紅白美々しく飾り立てた初荷の荷馬車が新宿さして軋らしたり、黑の帽子に紫の袈裟、白足袋に高足駄の坊さんが、年玉を入れた萌黃の大風呂敷包を頸からつるして兩手で抱へた草鞋ばきの寺男を連れて檀家の廻禮をしたりする外は、村は餅搗くでもなく、門松一本立つるでなく、至極平氣な一月である。唯農閑なので、青年の夜學がはじまる。井浚へ、木小屋の作事、屋根の葺き更へ、農具の修繕なども、此隙にする。日なたぼこ

りで孫いぢりにも飽いた爺の仕事は、喞へ煙管の背手で、ヒヨイ〳〵と野らの麥踏。若い者の仕事は東京行の下肥取りだ。寒中の下肥には、蛆が涌かぬ。堆肥製造には持て來いの季節、所謂寒練である。夜永の夜延べには、親子兄弟大きな爐側でコト〳〵藁を擣つては、俺ア幾括だ卿は何足かと競爭しての繩綯ひ草履草鞋作り。かみさんや娘は、油煙立つランプの傍でぼろつぎ。兵隊に出て居る自家の兼公の噂も出やう。東京歸りに兄が見て來た都の嫁入車の話もあらう。

都では晴の春着も夙に箪笥の中に入つて、歌留多會の手疵も痕になり、お座敷つゞきのあとに大妓小妓のぐつたりとして欠伸を嚙む一月末が、村の師走の煤掃き、つゞいて餅搗きだ。寒餅はわるくならぬ。水に浸して置いて、年中の茶受、忙しい時の飯代り、多い家では一石も二石も搗く。緣者親類加勢し合つて、歌聲賑やかに、東でもぽつたん、西でもどつたん、深夜の眠を驚かして、夜の十二時頃から夕方までも春く。陽曆で正月を濟ましてとくに餅は食ふてしまふた美的百姓の家へ、にこ

〳〵顏の糸ちやん春ちやんが朝飯前に牡丹餅を持て來てくれる。辰爺さん家のは大きくて他家の三倍もあるが、搗きが細かで、上手に紅入の寶袋なぞ拵へてよこす。下田の金さん處のは、餡は黑砂糖だが、手奇麗で、小奇麗な蓋物に入れてよこす。氣取つたおかず婆さんからは、餡がお氣に召すまいからと云つて、唯搗き立てをちぎつたまゝで一重よこす。禮に往つて見ると、奥は正月前らしく奇麗に掃かれて、土間にはちやんと鹽鮭の二枚もつるしてある。

二

二月は村の正月だ。松立てぬ家はあるとも、着物更へて長閑に遊ばぬ人は無い。甲州街道に木戸八錢、十錢の芝居が立つ。浪花節が入り込む。小學校で幻燈會がある。大きな天理教會、小さな耶蘇教會で、東京から人を呼んで說教會がある。府郡の技師が來て、農事講習會がある。節分は豆撒き。七日が七草。十一日が倉開き。

十四日が左義長。古風にやる家も、手輕でやらぬ家もあるが、要するに年年昔は遠くなつて行く。名物は秩父颪の乾風と霜解けだ。武藏野は、雪は少ない。一尺の上も積るは稀で、五日と消えぬは珍らしい。ある年四月に入つて、二尺の餘も積つたのは、季節からも、量からも、井伊掃部さん以來の雪だ、と村の爺さん達も驚いた。武藏野は霜の野だ。十二月から三月一ぱいは、夥しい霜解けで、草鞋か足駄長靴でなくては歩かれぬ。霜枯れの武藏野を乾風が颯々と吹きまくる。霜と風とで、人間の手足も、土の皮膚も、悉く輝赤ぎれになる。乾いた畑の土は直ぐ塵に化ける。風が吹くと、雲と舞ひ立つ。遠くから見れば正に火事の煙だ。火事もよくある。乾き切つた藁葺の家は、此上も無い火事の燃料、それに竈も風呂も藁屑をぼう〳〵燃すのだからたまらぬ。火事の少ないのが寧不思議である。村々字々に消防はあるが、無論間に合ふ事ぢやない。夜遊び歸りの誰かが火を見つけて、「おゝい、火事だよウ」と呼はる。「火事だつさ、火事は何處だンべか、——火事だよウ」と傳へる。「火事だ

よう」「火事だアよウ」彼方此方で消防の若者が聞きつけ、家に歸つて火事袢纏を着て、村の眞中の火の番小屋の錠をあけて消防道具を持出し、わッしよい〳〵駈けつける頃は、大概の火事は灰になつて居る。人家が獨立して周圍に立木がある爲に、人家櫛比の街道筋を除いては、村の火事は滅多に大火にはならぬ。然し火の粉一つ飛むだらば、必燒けるにきまつて居る。東京は火事があぶねえから、好い着物は預けとけや、と云つて、東京の息子の家の日ぼしい着物を悉皆預つて丸燒にした家もある。

梅は中々二月には咲かぬ。尤も南をうけた崖下の暖かい隈なぞには、ドウやらすると菫の一輪、紫に笑むで居ることもあるが、二月は中々寒い。下旬になると、雲雀が鳴きはじめる。チ、チ、チ、ドウやら雲雀が鳴いた樣だと思ふと、翌日は閉こえず、又の日いと明瞭に鳴き出す。あゝ雲雀が鳴いて居る。例令遠山は雪であらうとも、武藏野の霜や氷は厚からうとも、落葉木は皆裸で松の綠は黃ばみ杉の綠は鳶

色に焦げて居ようとも、秩父颪は寒からうとも、雲雀が鳴いて居る。冴えかへる初春の空に白光りする羽たゝきして雲雀が鳴いて居る。春の驩喜は聞く人の心に涌いて來る。雲雀は麥の伶人である。雲雀の歌から武藏野の春は立つのだ。

三

武藏野に春は來た。暖い日は、甲州の山が雪ながらほのかに霞む。庭の梅の雪とこぼるゝ邊に耳珍しくも藪鶯の初音が響く。然しまだ冴え返へる日が多い。三月もまだ中々寒い月である。初午には輪番に稻荷講の馳走。各自に米が五合に錢十五錢宛持寄つて、飲んだり食つたり驩を盡すのだ。まだまだと云ふて居る内に、そろ〳〵畑の用が出て來る。落葉掻き寄せて、甘藷や南瓜胡瓜の溫床の仕度もせねばならぬ。馬鈴薯も植ゑねばならぬ。

彼岸前の農家の一大事は、奉公男女の出代りである。田舍も年々人手が尠なく、

良い奉公人は引張り合だ。近くに東京と云ふ大渦がある。何處へ往つても直ぐ錢になる種々の工場があるので、男も女も愚圖〻〻云はれると直ぐぷいと出て往つて了ふ。寺本さんの作代は今年も勤續と云ふが、盆暮の仕着せで九十圓、彼樣な好い作代なら廉いもンだ、と皆が羨む。亥太郎さんの末の子は今年十二で、下田さんの子守に月五十錢で雇はれて行く。下唇の厚い久さんは、本家で仕事の暇を、大盡の伊三郎さん處で、月十日のきめで二十五圓。石山さんが隣村の葬式に往つて居ると娘が駈けて來て、作代が逃げ出すと云ふので、石山さんは遽てゝ葬式の場から尻引つからげて作代引とめに走つて行く。勘さんの嗣子の作さんは草鞋ばきで女中を探してあるいて居る。些好きゝうな養蠶傭の女なぞは、去年の内に相談がきまつてしまふ。メレンスの半襟一かけ、足袋の一足、窃と他の女中の袂にしのばせて、來年の餌にする家もある。其等の出代りも濟むで、やれ一安心と息をつけば、最早彼岸だ。

線香、花、水桶なぞ持つた墓參が續々やつて來る。丸髷や紋付は東京から墓參に來たのだ。寂しい墓場にも人聲がする。線香の煙が上る。沈丁花や赤椿が、竹筒に挿される。新しい卒塔婆が立つ。緋の袈裟かけた坊さんが畑の向ふを通る。中日は村の路普請。遊び半分若者總出で、道側にさし出た木の枝を伐り拂つたり、些ばかりの芝土を路の眞中に拋り出したり、路壞しか路普請か分からぬ。

四

四月になる。愈春だ。村の三月、三日には雛を飾る家もある。菱餅草餅は、何家でも出來る。小學校の新學年。つい去年まで碌に口も利けなかつた近所の喜左坊が、兵隊帽子に新らしいカバンをつるし、今日から小學第一年生だと小さな大手を振つて行く。五六年前には、式日以外女生の袴など滅多に見たこともなかつたが、此頃では日々の登校にも海老茶が大分殖えた。小學校に女教員が來て以來の現象である。

桃之夭々、其葉蓁々、桃の節句は昔から婚嫁の季節だ。村の嫁入婿取は多く此頃に行はれる。三日三晩村中呼んでの飲明しだの、「目出度、〻〻〻の若松樣よ」の歌で十七荷の嫁入荷物を練込むなぞは、大々盡の家の事、大抵は萬事手輕の田舍風、花嫁自身髮結の家から島田で歸つて着物を更へ、車は贅澤、甲州街道まで歩いてガタ馬車で嫁入るなぞはまだ好い方だ。足入れと云つてこつそり嫁を呼び、都合の好い時あらためて腰入をする家もある。はずむだところで調布あたりから料理を呼んでの饗宴は、唯親類緣者まで、村方一同へは、婿は紋付で組内若くは親類の男に連れられ、軒別に手拭の一筋半紙の一帖も持つて挨拶に廻るか、嫁は眞白に塗つて、掻卷程の紋付の裾を赤い太い手で持つて、後見の婆さんかかみさんに連れられてお辭儀をして廻れば、所謂顏見せの義理は濟む。村は一月晩れでも、寺は案外陽曆で行くのがあつて、四月八日はお釋迦樣の誕生會。寺々の鐘が子供を呼ぶと、爺か嬶か姉に連れられた子供が、小さな竹筒を提げて、嬉々として甘茶を汲みに行く。

東京は櫻の盛、車も通れぬ程の人出だつた、と麴町まで下肥ひきに往つた音吉の話。村には櫻は少いが、それでも桃が咲く、李が咲く。野はすみれ、たんぽゝ、春龍膽、草木瓜、薊が咲き亂るゝ。「木瓜薊、旅して見たく野はなりぬ」忙しくなる前に、此花の季節を、御嶽詣、三峰かけて榛名詣、汽車と草鞋で遊んで來る講中の者も少くない。子供連れて花見、潮干に出かける村のハイカラも稀にはある。浮かれて蝶が舞ひはじめる。意地惡の蛇も穴を出る。空では雲雀がます〳〵勢よく鳴きつれる。其れに喚び出される樣に、麥がつい〳〵と伸びて穂に出る。子供がぴい——ッと吹く麥笛に、武藏野の日は永くなる。三寸になつた玉川の鮎が、密漁者の手から窃と旦那の勝手に運ばれる。仁左衞門さん宅の大欅が春の空を摩でて淡褐色に煙りそめる。雜木林の楢が逸早く、櫟はやゝ晩れて、芽を吐きそめる。貯藏の里芋も芽を吐くので、里芋を植ゑねばならぬ。月の終は、若葉の盛季だ。若々とした武藏野に復活の生氣が盈ち溢れる。色々の蟲が生れる。田圃に蛙が泥聲をあげる。水が

ぬるむ。そろ〳〵種籾も浸さねばならぬ。桑の葉がほぐれる。彼方も此方も養蠶前の大掃除、蠶具を乾したり、ばた〳〵莚をはたいたり。月末には早い處では掃き立てる。蠶室を有つ家は少いが、何樣な家でも少くも一二枚飼はぬ家はない。筍の出さかりで、孟宗藪を有つ家は、朝々早起きが樂だ。肥料もかゝるが、一反八十圓から百圓にもなるので、雜木山は追々孟宗藪に化けて行く。

五

五月だ。來月の忙さを見越して、村でも此月ばかりは陽暦で行く。大麥も小麥も見渡す限り穂になつて、綠の畑は夜の白々と明ける樣に、總々とした白い穂波を漂はす。其が朝露を帶びる時、夕日に榮えて白金色に光る時、人は雲雀と歌聲を競ひたくなる。五日は柏餅の節句だ。目もさむる若葉の綠から、黑い赤い紙の鯉がぬうと出てほら〳〵跳つて居る。五月五日は府中大國魂神社所謂六所樣の御祭禮。新し

い紺の腹掛、紺股引、下ろし立てのはだし足袋、切り立ての手拭を顎の下でチョッキリ結びの若い衆が、爺をせびつた小使の三圓五圓腹掛に捻込んで、四尺もある手製の杉の撥を擔いで、勇んで府中に出かける。六所様には徑六尺の上もある大太鼓が一個、中太鼓が幾個かある。若い逞しい兩腕が、撥と名づくる棍棒で力任せに打つ音は、四里を隔てゝ鼕々と遠雷の如く響くのである。府中の祭とし云へば、昔から阪東男の元氣任せに微塵になる程御神輿の衝撞あひ、太鼓の撥のたゝき合、十二時を合圖に燈明と云ふ燈明を消して、眞闇の中に人死が出來たり處女が女になつたり、亂暴の限を盡したものだが、警察の世話が屆いて、此頃では滅多な事はなくなつた。

落葉木は若葉から漸次青葉になり、杉松樫などの常綠木が古葉を落し落して最後の衣更をする。田は紫雲英の花ざかり。林には金蘭銀蘭の花が咲く。せんまいや、稀に蕨も立つが、滅多に見かへる者も無い。八十八夜だ。其れ茶も摘まねばならぬ。

茶は大抵葉のまゝで賣るのだ。隱元、玉蜀黍、大豆も蒔かねばならぬ。降つて來さうだ。桑は伐つたか。桑つきが惡いはお蠶様が如何ぞしたのぢやあるまいか。養蠶教師はまだ廻つて來ないか。種籾は如何した。田の荒おこしもせねばならぬ。苗代掻きもせねばならぬ。最早早生の陸稻も蒔かねばならぬ。何かと云ふ内、胡瓜、南瓜、甘藷や茄子も植ゑねばならぬ。稗や黍の秋作も蒔かねばならぬ。月の中旬には最早大麥が色づきはじめる。三寸の綠から鳴きはじめた麥の伶人の雲雀は、麥が熟れるぞ、起きろ、急げと朝未明から囀づる。折も折とて徵兵の檢査。五分苅頭で紋付羽織でも引かけた體は逞しく顏は子供ゝゝした若者が、此村からも彼村からも府中に集まる。川端の嘉ちやんは甲種合格だつてね、俺が家の忠はまだ抽籤は濟まねえが、海軍に採られべつて事だ、俺も稼げる男の子はなし、忠をとられりや作代でも雇ふべい、國家の爲だ、仕方が無えな、と與右衞門さんが舌鼓うつ。下田の金さん宅では、去年は兄貴が抽籤で免れたが、今年は稻公が彼體格で、砲兵にとられる

ことになつた。當人は勇んで居るが、阿母が今から萎れて居る。

頓着なく日は立つて行く。わかれ霜を氣遣ふたは昨日の様でも、最早春蟬が鳴き出して青葉の蔭がそゞろ戀しい日もある。詩人が歌ふ綠蔭幽草白花を點ずるの時節となつて、畑の境には雪の様に卵の花が咲きこぼれる。林端には白いエゴの花がこぼれる。田川の畔には、花茨が芳しく咲き亂れる。然し見かへる者はない。大切の大切のお蠶様が大きくなつて居るのだ。然し月の中に一度雹祭だけは屹度鎭守の宮でする。甲武の山近い三多摩の地は、甲府の盆地から發生する低氣壓が東京灣へぬける通路に當つて居るので、雹や雷雨は名物である。秋の風もだが、春暮初夏の雹が殊に恐ろしいものになつて居る。雹の通る路筋はほゞきまつて居る。大抵上流地から多摩川に沿ふて下り、此邊の村を掠めて、東南に過ぎて行く。既に五年前も成人の拳大の恐ろしい雹を降らした。一昨年も唯十分か十五分の間に地が白くなる程降つて、場所によつては大麥小麥は種も殘さず、桑、茶、其外青物一切全滅した

處もある。可なりの生活をして居ながら、錢になると云へば、井浚へでも屋根葺の手傳でも何でもする隣字の九右衞門爺さんは、此雹に畑を見舞はれ、失望し切つて蒲團をかぶつて寢てしまふた。ゾラの小說「土」に、ある慾深の若い百姓が雹に降られて天に向つて拳をふり上げ、「何ちう事をしくさるか」と怒鳴るところがあるが、無理はない。此邊では「雹亂」と云つて、雹は戰爭よりも恐れられる。そこで雹祭をする。榛名様に願をかける。然し榛名様も、鎭守の八幡も、如何ともしかね玉ふ場合がある。出水の患が無い此村も、雹の賜物は折々受けねばならぬ。村の天に納める租稅である。

六

六月になつた。麥秋である。「富士一つ埋み殘して青葉かな」其青葉の青闇い間々を、熟れた麥が一面日の出の様に明るくする。陽曆六月は「農功五月急於弦」と

云ふ農家の五月だ。農家の戰爭で最劇戰は六月である。六月初旬は、小學校も臨時農繁休をする。猫の手でも使ひたい時だ。子供一人、ドウして中々馬鹿にはならぬ。初旬には最早蠶が上るのだ。中旬には大麥、下旬には小麥を苅るのだ。

最早梅雨に入つて、じめ〳〵した日がつゞく。簑笠で田も植ゑねばならぬ。畑勝ちの村では、田植は一仕事、「植田をしまふとさば〳〵するね」と皆が云ふ。雨間を見ては、苅り殘りの麥も苅らねばならぬ。苅りおくれると、畑の麥が立つたまゝに粒から芽をふく。油斷を見すまして作物其方退けに增長して來た草もとらねばならぬ。甘藷の蔓もかへさねばならぬ。陸稻や黍、稗、大豆の中耕もしなければならぬ。二番茶も摘まねばならぬ。お屋敷に叱られるので、東京の下肥ひきにも行かねばならぬ。時も時とて飯料の麥をきらしたので、水車に持て行つて一晩寢ずの番をして搗いて來ねばならぬ。最早甲州の繭買が甲州街道に入り込むだ。今年は値が好くて、川端の岩さん家では、四圓十五錢に賣つたと云ふ噂が立つ。隣村の濱田さんも繭買

をはじめた。工女の四五人入れて足踏器械で製糸をやる仙ちやん、長さんも、即座師の鑑札を受けて繭買をはじめた。自家のお春つ子お兼つ子に一貫目何錢の搔き賃をくれて、大急ぎで搔いた繭を車に積んで、重い車を引張つて此處其處相場を聞き合はせ、一錢でも高い買手をやつと見つけて、一切合切屑繭まで賣つてのけて、手取が四十九圓と二十五錢。夜の目も寢ずに五十兩足らずかと思ふても、矢張まとまつた金だ。持て歸つて、古簞笥の奥にしまつて茶一ぱい飲むと直ぐ畑に出なければならぬ。

空ではまだ雲雀が根氣よく鳴いて居る。村の木立の中では、何時の間にか栗の花が咲いて居る。田圃の小川では、蛙切が口やかましく終日騒いで居る。杜鵑が啼いて行く夜もある。梟が鳴く日もある。水鷄がコト〳〵たゝく宵もある。螢が出る。蟬が鳴く。蛙が鳴く。蚊が出る。ブヨが出る。蠅が眞黑にたかる。蚤が跋扈する。カナブン、瓜蠅、テントウ蟲、野菜につく蟲は限もない。皆生命だ。皆生きねばな

らぬのだ。到底取りきれる事ではないが、うつちやつて置けば野菜が全滅になる、取れるだけは取らねばならぬ。此方も生きねばならぬ人間である。手が足りぬ。手が足りぬ。自家の人數ではやりきれぬ。果ては甲州街道から地所にはなれた百姓を雇ふて、一反何程の請負で、田も植ゑさす、麥も苅らす。それでもまだやり切れぬ。墓地の骸骨でも引張り出して來て使ひたい此頃には、死人か大病人の外は手をあけて居る者は無い。盲目の婆さんでも、手さぐりで茶位は沸かす。豌豆や隱元は畑に珠數生りでも、もいで煮て食ふ暇は無い。如才ない東京場末の煮豆屋が鈴を鳴らして來る。飯の代りに黍の餅で濟ます日もある。近い所は、起きぬけに朝飯前の朝作り、遠い畑へはお春つ子が片手に大きな藥鑵、片手に茶受の里芋か餅かを入れた風呂敷包を重さうに提げ、小さな體を歪めてお八つを持て行く。斯季節に農家を訪へば大抵は門をしめてある。猫一疋居ぬ家もある。何を問ふても、くる〳〵とした眼を睜つて、「知ンねェや」と答ふる五六歳の女の子が赤ン坊と唯二人留守して居る家

もある。斯樣な時によく子供の大怪我がある。家の内は麥の芒だらけ、墓地は草だらけで、お寺や教會では坊さん教師が大欠伸して居る。後生なんか願ふて居る暇が無いのだ。

七

忙しい中に、月は遠慮なく七月に入る。六月は忙しかつたが、七月も忙しい。忙しい、忙しい。何度云ふても忙しい。日は永くても、仕事は終へない。夜は短くてもおち〳〵眠ることが出來ぬ。何處の娘も赤い眼をして居る。何處のかみさんも、半病人の蒼い顏をして居る。短氣の石山さんが、鈍な久さんを慳貪に叱りつける。「車の心棒は鐵だが、鐵だアて使や耗るからナ、俺ア段々稼げなくなるのも無理はねえや」と、小男ながら小氣味よく稼ぐ辰爺さんがこぼす。「違ねえ、俺ア辰さんよか年の十も下だンべが、何糞ッ若け者に負けるもンかつてやり出しても、第一息

がつゞかんからナ」と岩壘づくりの與右衞門さんが相槌をうつ。然し耗つても錆びても、心棒は心棒だ。心棒が廻はらぬと家が廻はらぬ。折角苅り入れた麥も早く扱いて撲つて俵にしなければ蝶々になる。今日も雨かと思ふたりや、さあお天道樣が出なさつたぞ、皆來うと呼ばつて、胡麻鹽頭に向鉢卷、手垢に光るくるり棒押取つて禾場に出る。それつと子供が飛び出す。兄が出る。弟が出る。嫁が出る。娘が出る。腰痛でなければ婆さんも出る。奇麗に掃いた禾場に一面の穗麥を敷いて、男は男、女は女と相並むでの差向ひ、片足踏出し、氣合を入れて、一上一下とかはる〳〵打下ろす。男は股引に腹かけ一つ、黑鉢卷の經木眞田の帽子を阿彌陀にかぶつて、赤銅色の逞しい腕に撚をかけ、菅笠若くは手拭で姉樣冠りの若い女は赤襷手甲がけ、腕で額の汗を拭き〳〵、くるり棒の調子を合はして、ドウ、ドウ、バッタ、バタ、時々群の一人が「ヨウ」と勇みを入れて、大地も挫げと打下ろす。「お前さんとならばヨウ、何處までもウ、親を離れて彼世までもウ」若い女の好い聲が歌ふ。「コラコ

ラ」皆が囃す。禾場の日はかん〳〵照つて居る。くるり棒がぴかりと光る。若い男女の顏は、熟した桃の樣に紅光つて居る。空には白光りする岩雲が堆く湧いて居る。

七月中旬、梅雨があけると、眞劍に暑くなる。明るい麥が取り去られて、田も畑も綠に返へる。然し其は春暮の嫩らかな綠では無い、日中は綠の焰を吐く綠である。朝夕は蜩の聲で涼しいが、晝間は油蟬の音の煎りつく樣に暑い。涼しい草屋でも、九十度に上る日がある。家の內では大抵誰も裸體である。畑ではズボラの武太さんは褌一つで陸稻のサクを切つて居る。十五六日は、東京のお盆で、此處其處に藪入姿の小さな白足袋があるく。甲州街道の馬車は、此等の小僧さんで滿員である。

八

暴風にも靜な中心がある。忙しい農家の夏の戰鬪にも休戰の期がある。

七月末か、八月初か、麥も仕舞ひ、草も一先づ取りしまふた程よい頃を見はから

つて、月番から總郷上り正月のふれを出す。總郷業を休み足を洗ふて上るの意である。其期は三日。中日は村總出の草苅り路普請の日とする。右左から恣に公道を侵した雑草や雑木の枝を、一同磨ぎ耗らした鎌で遠慮會釋もなく切拂ふ。人よく道を弘むを、文義通りやるのである。慾張と名のある不人望な人の畑や林は、此時こそ思ひ切り切りまくる。昔は兎に角、此の頃では世の中せち辛くなつて、物日にも稼ぐことが流行する。總郷上り正月にも、畑に田にぽつ〳〵働く影を見うける。

八月は小學校も休業だ。八月七日は村の七夕、五色の短冊さげた笹を立つる家もある。やがて于蘭盆會。苧殼のかはりに麥からで手輕に迎火を焚いて、それでも盆だけに墓地も家内も可なり賑合ひ、緋の袈裟をかけた坊さんや、仕着せの浴衣單衣で藪入に行く奉公男女の影や、斷續して來る物貰ひや、盆らしい氣もちを見せて通る。然し斯貧しい小さな野の村では、昔から盆踊りと云ふものを知らぬ。一年中で一番好い水々しい大きな月が上つても、其れは斷片的に若者の歌を嗾るばかりであ

る。まる〳〵とした月を象どる環を作つて、大勢の若い男女が、白い地を踐み、黒い影を落して、歌ひつ踊りつ夜を深して、傾く月に一人減り二人寢に行き、到頭「四五人に月落ちか、る踊かな」の趣は、此邊の村では見ることが出來ぬ。

夏蠶を飼ふ家はないが、秋蠶を飼ふ家は澤山ある。秋蠶を飼へば、八月はまだ忙しい月だ。然し秋蠶のまだ忙しくならぬ隙を狙つて、富士詣、大山詣、江の島鎌倉の見物をして來る者も少くない。大山へは、夜立ちして十三里日着きする。五圓持て夜徹し歩るき、眠たくなれば堂宮に寢て、唯一人富士に上つて來る元氣な若者もある。夏の命は日と水だ。照らねばならず、降らねばならぬ。多摩川遠い此村里では、水害の患は無いかはり、旱魃の恐れがある。大抵は都合よく夕立が來てくれる。雨乞は六年間に唯一度あつた。降つて欲しい時に降れば、直ぐ「おしめり正月」である。傳染病が襲ふて來るも此月だ。赤痢、窒扶斯で草葺の避病院が一ぱいになる年がある。眞白い診察衣を着た醫員が歩く。大至急清潔法施行の布令が來る。村

の衛生係が草鞋ばきの巡査さんと溷、掃溜を見てあるく。其巡査さんの細君が赤痢になつたと云ふ評判が立つ。鉦や太鼓で念佛唱へてねりあるき、疫病禳ひする村もある。

其様な騒ぎも何時しか下火になつて、暑い〳〵と云ふ下から、ある日秋蟬がせはしく鳴きそめる。武藏野の秋が立つ。早稲が穂を出す。尾花が出て覗く。甘藷を手掘りすると、早生は赤兒の腕程になつて居る。大根、漬菜を蒔かねばならぬ。蕎麥、秋馬鈴薯もそろ〳〵蒔かねばならぬ。暫く綠一色であつた田は、白つぽい早稲の穗の色になり、畑では稗が黑く、黍が黃に、粟が褐色に熟れて來る。粟や黍は餅にしてもまだ食へる。稗は乃木さんでなければ中々食へぬ。此邊では、米を非常、挽割麥を常食にして、よく〳〵の家でなければ純稗の飯は食はぬ。下肥ひきの辨當に稗の飯でも持つて行けば、冷たい稗はザラ〳〵して咽を通らぬ。湯でも水でもぶつかけてざぶ〳〵流し込むのである。若い者の樂の一は、食ふ事である。主人は麥

を食つて、自分に稗を食はした、と忿つて飛び出した作代もある。

九

九月は農家の厄月、二百十日、二百二十日を眼の前に控へて、朔日には風祭をする。麥桑に雹を氣づかつた農家は、稻に風を氣づかはねばならぬ。九月は農家の鳴戸の瀨戸だ。瀨戸を過ぐれば秋の彼岸。蚊帳を仕舞ふ。おかみや娘の夜延仕事が忙しくなる。秋の田園詩人の百舌鳥が、高い栗の梢から聲高々と鳴きちぎる。栗が笑む。豆の葉が黃ばむ。雁來紅が染むを相圖に、夜は空高く雁の音がする。林の中、道草の中、家の中まで入り込んで、蟲と云ふ蟲が鳴き立てる。早稲が黃ろくなりそめる。蕎麥の花は雪の樣だ。彼岸花と云ふ曼珠沙華は、此邊に少ない。此あたりの彼岸花は、萩、女郎花、嫁菜の花、何よりも初秋の榮を見せるのが、紅く白く澤々と紺總を靡かす樣な花薄である。子供が其れを剪つて來て、十五夜の名月樣に上げ

る。萱は萱料にして長もちするので、小麥からの一束五厘に對し、萱は一錢も其上もする。そこで萱野を仕立てゝ置く家もある。然し東京がますゝ西へ寄つて來るので、萱野も雜木山も年々減つて行くばかりである。

九月は農家の祭月、大事な交際季節である。風の心配も兎やら恁うやら通り越して、先收穫の見込がつくと、何處の村でも祭をやる。木戸錢御無用、千客萬來の芝居、お神樂、其れが出來なければ詮方無しのお神酒祭。今日は粕谷か、明日は廻澤烏山は何日で、給田が何日、船橋では、上下祖師ヶ谷では、八幡山では、隣村の北澤では、と皆が指折數へて浮き立つ。彼方の村には太鼓が鳴る。此方の字では舞臺がけ。一村八字、寄合ふて大きくやればよさゝうなものゝ、八つの字には八つの意志と感情と歴史があつて、二百戸以上の烏山はもとより、二十七戸の粕谷でも、十九軒の八幡山でも、各自に自家の祭をせねば氣が濟まぬ。祭となれば、何樣な家でも、强飯を蒸す、煮染をこさへる、饂飩をうつ、甘酒を作つて、他村の親類緣者を

招く。東京に緣づいた娘も、子を抱き亭主や緣者を連れて來る。今日は此方のお神樂で、平生は眞白な鳥の糞だらけの鎭守の宮も眞黑になる程人が寄つて、安小間物屋、駄菓子屋、鮨屋、おでん屋、水菓子屋などの店が立つ。神樂は村の能狂言、神官が家元で、村の器用な若者等が神樂師をする。無口で大兵の鐵さんが氣輕に太鼓をうつたり、氣輕の龜さんが髮髯蓬々とした面をかぶつて眞面目に舞臺に立ちはだかる。「あ、ありや龜さんだよ、まア」と可笑しざかりのお島がくつ〳〵笑ふ。今日自家の祭酒に醉ふた仁左衞門さんが、明日は隣字の芝居で、透綾の羽織でも引被け、寸志の紙包を懷中して、芝居へ出かける。毎日近所で顏を合して居ながら、畑の畔の立話にも、「今日は」「今日は」と抑天氣の挨拶からゆる〳〵とはじめる田舍氣質で、仁左衞門さんと隣字の幹部の忠五郎さんとの間には、芝居の科白の受取渡しよろしくと云ふ挨拶が鄭重に交換される。輪番に主になつたり、客になつたり、呼びつ喚ばれつ、祭は村の親睦會だ。三多摩は昔から人の氣の荒い處で、政黨騷ぎでは

よく血の雨を降らし、氣の立つた日露戰爭時代は、農家の子弟が面籠手かついで調布まで一里半擊劍の朝稽古に通つたり柔道を習つたりしたものだが、六年前に一度粕谷八幡山對烏山の間に大喧嘩があつて、仕込杖が光つたり怪我人が出來たり長い間揉めくつた以來、此と云ふ喧嘩の沙汰も聞かぬ。泰平有象村々酒。祭が繁昌すれば、田舍は長閑である。

十

十月だ。稻の秋。地は再び黃金の穗波が明るく照り渡る。早稻から米になつて行く。性急に百舌鳥が鳴く。日が短くなる。赤蜻蛉が夕日の空に數限りもなく亂れる。柿が好い色に照つて來る。ある寒い朝、不圖見ると富士の北の一角に白いものが見える。雨でも降つたあとの冷たい朝には、水霜がある。

十月は雨の月だ。雨がつゞいたあとでは、雜木林に茸が立つ。野ら仕事をせぬ腰

の曲つた爺さんや、赤兒を負つたお春つ子が、笊をかゝへて採りに來る。椹茸、濕地茸、稀に紅茸、初茸は滅多になく、多いのが油坊主と云ふ茸だ。一雨一雨に氣は冷えて行く。田も林も日に〳〵色づいて行く。甘藷が掘られて、續々都へ運ばれる。田舍は金が乏しい。村會議員の石山さんも、一錢違ふと謂ふて甲州街道の馬車にも烏山から乘らずに山谷から乘る。だから、村の者が甘藷を出すにも、一貫目につき五厘も値がよければ、二里の幡ヶ谷に下ろすより四里の神田へ持つて行く。

茶の花が咲く。雜木林の椹に絡む自然薯の蔓の葉が黃になり、藪からさし出る白膠木が眼ざむる樣な赤になつて、お納戶色の小さなコップを幾箇も列ねて龍膽が咲く。樫の木の下は、ドングリが篩で掃く程だ。最早豌豆や蠶豆も蒔かねばならぬ。蕎麥も霜前に苅らねばならぬ。また其れよりも農家の一大事、月の下旬から來月初旬にかけて、最早麥蒔きがはじまる。後押しの二人もついて、山の如く堆肥を積んだ車が頻に通る。先づ小麥を蒔いて、後に大麥を蒔くのである。奇麗に平した畑は

一條一條丁寧に尺竹をあて、繩ずりして、眞直ぐに西から東へ畝を立て、堆肥を置いて土をかけ、七藏が種を振れば、赤兒を負つた若いかみさんが竹杖ついて、片足かはりに南から北へと足で土をかけて、奇麗に踏んづけて行く。燻炭肥料の、條播のと、農會の勸誘で、一二年やつて見ても、矢張仕來りの勝手がよい方でやつて行くのが多い。

十一

霜らしい霜は、例年明治天皇の天長節、十一月三日頃に來る。手を淨めに前夜雨戸をあくれば、鍼先を吹つかくる樣な水氣が面を撲つて、遽てゝもぐり込む蒲團の中でも足の先が縮こまる程いやに冷たい、と思ふと明くる朝は武藏野一面の霜だ。草屋根と云はず、禾場と云はず、檐下から轉び出た木臼の上と云はず、出し忘れた物干竿の上のつぎ股引と云はず、田も畑も路も烏の羽の上までも、眞白だ。日が出

ると、晶々とした白金末になり、紫水晶末になるのである。山風をあらしと云へば霜の威力を何に譬へやう？　地の上の白火事とでも云はう。大抵のものは爛れてしまふ。桑と云ふ桑の葉は、ぐつたりとなつて、二日もすれば、齒がぬける樣にひとりでにぼろりと落ちる。生々として居た甘藷の蔓は、唯一夜に正しく湯煎られた樣に凋れて、明くる日は最早眞黑になり、觸ればぼろ〳〵の粉になる。シャンとして居た里芋の莖も、ぐつちやりと腐つた樣になる。畑が斯うだから、園の內も靑い物は全滅、色ある物は一夜に爛れて了ふのである。霜にめげぬは、靑々とした大根の葉と、霜で甘くなる漬菜の類と、それから綠の縞を土に織り出して最早ぼつ〳〵生えて來た大麥小麥ばかりである。

霜は霽に伴ふ。霜の十一月は、日本晴の明るい明るい月である。富士は眞白。武藏野の空は高く、たゝけばカン〳〵しさうな、碧瑠璃になる。朝日夕日が美しい。月や星が冴える。田は黃色から白茶になつて行く。此處其處の雜木林や村々の落葉

木が、最後の榮を示して黄に褐に紅に照り渡る。綠の葉の中に、柚子が金の珠を掛ける。光明は空から降り、地からも湧いて來る。小學校の運動會で、父兄が招かれる。村の惠比壽講、白米五合錢十五錢の持寄りで、夜徹の食つたり飲んだり話したりがある。日もいよ〳〵短くなる。甘藷や里芋も掘つて、土窖に藏はねばならぬ。中稻も苅らねばならぬ。其内に晩稻も苅らねばならぬ。でも、夏の戰鬪に比べては、何を云つても最早しめたものである。朝霜、夜嵐、晝は長閑な小春日がつゞく。「小春日や田舍に廻る看賣」。「鰹は？　鰹？」「秋刀魚や秋刀魚！」のふれ聲が村から村を廻つてあるく。牛豚肉は滅多に食はず、川魚は少し、稀に鯉に吸はれた鷄でも食へば骨までたゝいて食ひ、土の物の外は大抵鹽鮭、めざし、棒鱈にのみ海の恩惠を知る農家も、斯樣な時には炙れば青い焰立つ脂ぎつた生魚を買つて舌鼓うつのである。

月の末方には、除隊の兵士が歸つて來る。近衞か、第一師團か、せめて横須賀位

ならまだしも、運惡く北海道三界旭川へでもやられた者は、二年ぶり三年ぶりで歸つて來るのだ。親類緣者は遠出の出迎、村では村内少年音樂隊を先に立て、迎何々君之歸還の旗押立てゝ、村界まで迎ひに出かける。二年三年の兵營生活で大分世慣れ人ずれて來た丑之助君が、羽織袴、靴、中折帽、派手をする向きは新調のカーキー服にギュウ〳〵云ふ磨き立ての長靴、腰の淋しいのを氣にしながら、胸に眞新しい在鄕軍人徽章をつるして、澄まし返つて歩いて來る。面々各自の挨拶がある。鎭守の宮にねり込んで、取りあへず神酒一獻、古顏の在鄕軍人か、若者頭の音頭で、大日本帝國、天皇陛下、大日本帝國陸海軍、何々丑之助君の萬歲がある。丑之助君が何々有志諸君の萬歲を呼ぶ。其れから丑之助君を宅へ送つて、いよ〳〵飲食だ。赤の飯、刻鰯蒟蒻里芋蓮根の煮染、豆腐に芋の汁、はずむだ家では菰冠りを一樽とつて、主も客も芽出度と云つて飲み、萬歲と云つては食ひ、滿腹滿足、眞赤になつて祝ふのだ。二三日すると歸り新參の丑之助君が、歸つた時の服裝で神妙に禮廻

りをする。軒別に手拭か半紙。入營に餞別でも貰つた家へは、隊名姓名を金文字で入れた盃や塗盆を持參する。兵士一人出す家の物入も大抵では無い。

兵隊さんの出代りで、除隊を迎へると、直ぐ入營送りだ。體格がよく、男の子が多くて、陸海軍擴張の今日と來て居るので、何れの字からも二人三人兵士を出さぬ年は無い。白羽の箭が立つた若者には、勇んで出かける者もある。抽籤を遁れた禮參りに、わざ〳〵鴻の巣在の何宮さんまで出かける若者もある。二十歳前後が一番百姓仕事に實が入る時ですから、とこぼす若い爺さんもある。然し全國皆兵の今日だ。一人息子でも、可愛息子でも、云ひ聞かされた「國家の爲」だ、出せとあつたら出さねばならぬ。出さぬと云つたら、お上に濟まぬ。近所に濟まぬ。そこで父の右腕、母のおもひ子の岩吉も、頭は五分刈、中折帽、紋付羽織、袴、靴、凛とした裝で、少しは怯々した然し澄ました顔をして、鎮守の宮で神酒を飲まされ、萬歳の聲と、祝入營の旗五六本と、村樂隊と、一字總出の戸主連に村はづれまで見送られ、

知らぬ生活に入る可く往つてしまふ。二三日、七八日過ぐると、軒別に入營濟の御禮のはがきが來る。

十二

兵隊さんの出代りを村の一年最後の賑合にして、あとは寂しい初冬の十二月に入る。

「稼收平野濶」晩稲も苅られて、田圃も一望ガランとして居る。畑の桑は一株づゝ髻を結はれる。一束づゝ奇麗に結はへた新藁は、風よけがはりにずらりと家の周圍にかけられる。ざら〳〵と稲を扱く音。カラ〳〵と唐箕車を廻す響。大根引、漬菜洗ひ、若い者は眞赤な手をして居る。晝は北を圍ふた南向きの小屋の蓆の上、夜は爐の傍で、かみさんはせつせと股引、足袋を繕ふ。夜は晩くまで納屋に籾ずりの響がする。突然にざあと時雨が來る。はら〳〵と庇をうつて霰が來る。ちら〳〵と

風花が降る。北から凩が吹いて來て、落葉した村の木立を騒々しく鳴らす。乾いた落葉が、遽てゝカラカラと舞ひ奔る。籌を逆に立た様な雑木山に、長い鋸を持つた樵夫が入つて、喞へ煙管で楢や櫟を薪に伐る。海苔疎朶を積んだ車が村を出る。冬至までは、日がます〳〵つまつて行く。六時にまだ小暗く、五時には最早闇い。流しもとに氷が張る。霜が日に〳〵深くなる。

十五日が世田ヶ谷のボロ市。世田ヶ谷のボロ市は見ものである。松陰神社の入口から世田ヶ谷の上宿下宿を打通して、約一里の間は、兩側にずらり並んで、農家日用の新しい品々は素より、東京中の煤掃きの塵箱を此處へ打ち明けた様なあらゆる襤褸やガラクタをずらりと並べて、賣る者も賣る、買ふ者も買ふ、と唯驚かるゝばかりである。見世物が出る。手輕な飲食店が出る。咽を稗が通る様に、店の間を押し合ひへし合ひしてぞろ〳〵人間が通る。近郷近在の爺さん婆さん若い者女子供が、股引草鞋で大風呂敷を持つたり、荷車を挽いたり、目籠を背負つたりして、早い者

は夜半から出かける。新しい莚、筍掘器、天秤棒を買つて歸る者、草履の材料やつぎ切れにする襤褸を買ふ者、古靴を値切る者、古帽子、古洋燈、講談物の古本を冷かす者、稲荷鮨を頬張る者、玉乘の見世物の前にぽかんと立つ者、人さま〴〵物さま〴〵の限を盡す。世田ヶ谷のボロ市を觀て悟らねばならぬ、世に無用のものは無い、而して悲觀は單に高慢であることを。

ボロ市過ぎて、冬至もやがてあとになり、行く〳〵年も暮になる。蛇は穴に入り人は家に籠つて、霜枯の武藏野は、靜かな晝にはさながら白日の夢に定に入る。寂しさうな烏が、此樫の村から田圃を啞々と鳴きながら彼欅の村へと渡る。稀には何處から迷ひ込んだか洋服ゲートルの獵者が銃先に鴫や鴨のけたゝましく鳴いて飛び立つこともあるが、また直ぐともとの寂しさに返へる。凩の吹く夜は、海の様な響が武藏野に起つて、人の心を遠く遠く誘ふて行く。但東京の屋敷に賴まれて餅を搗く家や、小使取りに餅舂きに東京に出る若者はあつても、村其ものには何處に師走

の忙しさも無い。二十五日、二十八日、晦日、大晦日、都の年の瀬は日一日と斷崖に近づいて行く。三里東の東京には、二百萬の人の海、嘸さま〳〵の波も立たう。日頃眺むる東京の煙も、此四五日は大息吐息の息卷荒く颺る樣に見える。然し此處は田舍である。都の師走は、田舍の霜月。冬枯の寂しい武藏野は、復活の春を約して、麥が今二寸に伸びて居る。氣に入りの息子を月の初に兵隊にとられて、寂しい心の辰爺さんは、冬至が過ぎれば日が疊の目一つづゝ永くなる、冬のあとには春が來る、と云ふ信仰の下に、時々竹篦で鍬の刄につく土を落しつゝ、悠々と二寸になつた麥のサクを切つて居る。

媒妁

結婚の媒妁を賴まれた。式は宜い樣にやつてくれとの事である。新郎とは昨今の知合で、新婦は初めて名を聞いた。媒妁なンか經驗もなし、斷つたが、是非との賴み、諾と面白半分引受けてしまふた。

明治四十年の九月某日、媒妁夫妻は小婢と三人がかりで草屋の六疊二室を清め、赤、白、鼠、婢の有まで借りて、あらん限りの毛布を敷きつめた。家のまはりも一わたり掃いた。隔ての唐紙を取拂ひ、テーブルを一脚東向きに据ゑ、露ながら折つて來た野の草花を花瓶一ぱいに挿した。女郎花、地楡、水引、螢草、うつぼ草、黄碧紫紅入り亂れて、あばら家も爲に風情を添へた。媒妁夫妻は心嬉しく、主人は綿絽の紋付羽織に木綿茶縞の袴、妻は紋服は御所持なしで透綾の縞の單衣にあらためて、徐に新郎新婦の到着を待つた。

正午過ぎ、村を騒がして八臺の車が來た。新郎新婦及縁者の人々である。新婦は初めて見た。眼のきれの長い佳人である。更衣室も無いので、仕切りの障子をしめ、二疊の板の間を半分占めた古長持の上に妻の鏡臺を置いた。鏡臺の背には、破簾を下げて煤だらけの勝手を隔てた。二十分の後此樂屋から現はれ出た花嫁君を見ると、秋草の裾模様をつけた淡紅色絽の晴着で、今咲いた芙蓉の花の様だ。花婿も黒絽紋付、仙臺平の袴、凛として座つて居る。

媒妁は一咳してやをら立上つた。

「勝田慶三郎」

「松居千代」

卒業免狀でも渡す時の様に、聲嚴に新郎新婦を呼び出して、テーブルの前に立たせた。而して媒妁は自身愛讀する創世記イザク、リベカ結婚の條を朗々と讀み上げた。

「祈禱を致します」

斯く云つて、媒妁がやゝ久しく精神を統一すべく默つて居ると、

「祈禱を致すのでございますか」

と新郎がやゝ驚いた様に小聲できく。媒妁は頓着なく祝禱をはじめた。

祈禱が終る。妻が介抱して、新郎新婦を握手させる。一旦新婦の手からぬいて置いた指環を新郎に渡し、あらためて新郎の手づから新婦の指に嵌めさす。二人ながら震へて居る。

屋敷に門無く、障子は穴だらけである。村あつてより見たこともない夥しい車の入來に眼を驚かした村の子供が、草履ばた〳〵大勢縁先に入り込んで、ぽかんとした口だの、青洟の出入する鼻だの、驚いた様な眼だのが、障子の穴から覗いて居る。

「何だ、ありや」。「あ、あ、あら、如何するだンべか」なンか云つて居る。

六疊の大廣間には、新郎新婦相並んで正面赤毛布の上に座つて居る。結婚證書を

三通新婦の兄者人に書いてもらつて、新郎新婦をはじめ其尊長達、媒妁夫妻も署名した。これで結婚式は芽出度終つた。小婢が茶を運んで來た。菓子が無いので、有り合せの梨を剝き、數が無いので小さく切つて、小楊枝を添へて出した。

四時過ぎお開きとなつた。

媒妁の役目相濟むだつもりで納まつて居ると、神田の料理屋で披露の宴をすると の事で、連れて來られた車にのせられ、十臺の車は靜かな村を犇めかして勢よく新宿に向つた。新宿から電車でお茶の水に下り、某と云ふ料理店に案内された。

媒妁は滅多に公會祝儀の席なぞに出た事のない本當の野人である。酒がはじまつた。手をついたり、お辭儀をしたり、小むつかしい獻酬の禮が盛に行はれる。酒を呑まぬ媒妁は、ぽかんとして皆の酒を飲むのを眺めて居る。料理が出たが、菜食主義の彼は肉食をせぬ。腹は無闇に減る。新郎の母者人が「ドウカお吸物を」との挨拶が無い前に、勝手に吸物椀の蓋をとつて、鱚のムスビは殘して松蕈とミツバばか

り食つた。

九時過ぎやつとお開きになつた。媒妁夫婦は一同に禮して、壽の字の風呂敷に包むだ引き物の鰹節籠を二つ折詰を二つもらつて、車で送られてお茶の水停車場に往つた。媒妁の家は菜食で、ダシにも昆布を使つて居るので、二つの鰹節包は二人の車夫にやつた。車夫は眼を圓しくて居た。

新宿に下りると、雨が盛に降つて居る。夜も最早十時、甲州街道口に一臺の車も居ない。媒妁夫婦は、潜りの障子だけあかりのさした店に入つて、足駄と傘とブラ提灯と蠟燭とマッチと糸經を買つた。而しておの〳〵糸經を被り、男が二人のぬいだ日和下駄を風呂敷包にして腰につけ、小婢にみやげの折詰二箇半巾に包むで片手にぶら下げて、尻高々とからげれば、妻は一張羅の夏帶を濡らすまいとて風呂敷を腰に卷き、單衣の裾短に引き上げて、提灯ぶら提げ、人通りも絶え果てた甲州街道三里の泥水をピチヤリ〳〵足駄に云はして歸つた。

「如何だ、此態を勝田君に書いてもらつたら、一寸茶番の道行が出來やうぢやないか」

夫が笑へば、妻も噴き出し、

「本當にね」

と相槌をうつた。

新郎勝田君は、若手で錚々たる劇作家である。

螢

先刻から田圃に呼びかはす男の子の聲がして居たと思ふたら、闇の門口から小さな影が二つ三つ四つ縁先にあらはれた。小さな握拳の指の間から、ちら〳〵碧い光を見せて居る。

皆近所の子で、先夜主人が「ミゼラーブル」の話を聞いて息をのむだ連中である。

「螢を捕つたね」

「え」

と一人が云つたが、

「あ、此れに這はせて見べいや」

と云つて、縁先に据ゑてある切株の上の小さな姫蘆の楕圓形の水盤へ、窃と拳の中

のものを移した。

すると、餘の子供が吾も吾もと皆手を水盤の上に解いた。水を吹いた小さな姫蘆の葉の上、莖の間、蘆の根ざす小さな岩の上に、生きた、綠玉、碧玉、孔雀石の片がほろ〳〵とこぼれて、其數約二十餘、葉末の露にも深さ一分の水盤の水にも映つて、光つたり、消えたり、嬉しさうに明滅して、飛び立たうともしない。

「綺麗だ喃」

「綺麗だ喃」

皆嬉々としてしたり貌にほめそやす。

「皆何してるだか」

云つて、また二人男の子が草履の音をさせて入つて來た。

「あッ綺麗だな、俺がのも明けてやるべ」

と云つて、また二人して八九疋螢の島へ螢を放つた。

主人と妻と逗留に來て居る都の娘と、ランプを隅へ押しやつて、螢と螢を眺むるこどもあるやうに、三十ばかりの螢がかはる〳〵明滅する。緣にかけたり蹲むだりして、子供は默つて見とれて居る。

斯凉しい活畫を見て居る彼の眼前に、何時とはなしにランプの明るい客間があらはれた。其處に一人の沈鬱な顏をして丈高い西洋人が立つて居る。前には學生が十五六人腰かけて居る。學生の中に十二位の男の子が居る。其は彼自身である。彼は十二の子供で、京都同志社の生徒である。彼は同窓諸子と宣教師デビス先生に招かれて、今茶菓と話の馳走になつて居るのである。米國南北戰爭に北軍の大佐であつたとか云ふデビス先生は、軍人だけに姿勢が殊に立派で、何處やら武骨な點もあつて、眞面目な時は頗る嚴格沈鬱な、一寸畏ろしい樣な人であつたが、子供の眼からも親切な、笑へば愛嬌の多い先生だつた。何かと云ふと頭を掉るのが癖だつた。毎

度先生に招かるゝ彼等學生は、今宵も蜜柑やケークの馳走になつた。赤い碁盤縞のフロックを着た先生の末子が愛想に出て來たが、うつかり放屁したので、學生がドッと笑ひ出した。其子が泣き出した。デビス先生は左の手で泣く子の頭を撫で、右手の金網の炮烙でハゼ玉蜀黍をあぶりつゝ、プチ、プチ、其はぜる響を口眞似して笑ひながら頭を掉られた。其つゞきである。先生は南北戰爭の逸事を話して、ある夜火光を見さへすれば敵が射擊するので、時計を見るにマッチを擦ることもならず、恰飛むで居た螢を捉へて時計にのせて時間を見た、と云ふ話をされた。

其れは彼が今此處に居る子供の一番小さなの位の昔であつた。其後彼はデビス先生に近しくする機會を有たなかつた。先生の夫人は其頃から先生よりも餘程ふけて居られた。後氣が變になり、歸國の船中太平洋の水屑になられたと聞いて居る。デビス先生は男らしく其苦痛に耐へ、宣教師排斥が一の流行になつた時代に處して、恚らず亂れず始終一貫同志社にあつて日本人の爲に盡し、「吾生涯即吾遺言也」との

訣辭を殘して、先年終に米國に逝かれた。

螢を見れば常に憶ひ出すデビス先生を、彼は今宵も憶ひ出した。

夕立雲

畑のものも、田のものも、林のものも、園のものも、蟲も、牛馬も、犬猫も、人も、あらゆる生きものは皆雨を待ち焦れた。

「おしめりがなければ、街道は塵埃で歩けないやうでございます」と甲州街道から毎日仕事に來るおかみが云つた。

「これでおしめりさへあれば、本當に好いお盆ですがね」と内の婢もこぼして居た。

兩三日來非常に蒸す。東の方に雲が立つ日もあつた。二聲三聲雷鳴を聞くこともあつた。

「いまに夕立が來る」

斯く云つて幾日か過ぎた。

今日早夕飯を食つて居ると、北から冷やりと風が來た。眼を上げると果然、北に一團紺靛色の雲が蹲踞むで居る。其紺靛の雲を背に、こんもりした隣家の杉樫の木立、孟宗竹の藪などが生々しい綠を浮かして居る。

「夕立が來るぞ」

主人は大聲に呼んで、手早く庭の乾し物、履物などを片づける。裏庭では、婢が駈けて來て洗濯物を取り入れた。

やがて食卓から立つて妻兒が下りて來た頃は、北天の一隅に埋伏し居た彼濃い紺靛色の雲が、倏忽の中にむら〳〵と湧き起つた。何の艶もない濁つた煙色に化り、見る〳〵天穹を這ひ上り、大軍の散開する樣に、東に、西に、天心に、ずゝずゝと廣がつて來た。

三人は芝生に立つて、驚嘆の眼を瞪つて斯夥しい雨雲の活動を見た。

あな夥しの雲の勢や。默示錄に「天は卷物を捲くが如く去り行く」と歌ふたも無

理はない。青空は今南の一軸に巻き蹙められ、煤煙の色をした雲の大軍は、其青空をすら餘さじものをと南を指してヒタ押しに押寄せて居る。つい今しがたまで雨を戀しがつて居た乾き切つた眞夏の喘ぎは何處へ往つたか。唯十分か十五分の中に、大地は恐ろしい雨雲の下に閉ぢこめられて、冷たい黯い冥府になつた。

雲の運動は秒一秒劇しくなつた。南を指して流るゝ雲、渦まく雲、眞黑に屯つて動かぬ雲、雲の中から生るゝ雲、雲を摩つて移り行く雲、淡くなり、濃くなり、淡くなり、北から東へ、東から西へ、北から西へ、西から南へ、逆流して南から東へ、世界中の煙突と云ふ煙突をこゝに集めて煤煙の限りなく涌く樣に、眼を驚かす雲の大行軍、音響を聞かぬが不思議である。

彼等は驚異の眼を瞪つて、此活動する雲の下に魅せられた樣に彳むだ。冷たい風がすうつすうつと顏に當る。後れ馳せに雷がそろ〳〵鳴り出した。北の方で、條をなさぬ紅や紫の電光が時々ぱつぱつと天の半壁を輝して閃めく。近づく雷雨を感じ

つゝ、彼等は猶頭上の雲から眼を離し得なかつた。薄汚い煤煙色をした滿天の雲はます〳〵南に流れる、水の樣に、霧の樣に、煙の樣に。空は皆動いて居る。濁い空の何の一寸四方として動いて居ないのはない。皆恐ろしい勢を以て動いて居る。仰ぎ見る彼等は、流るゝ雲に引きずられてやゝもすれば駈け出しさうになる足を踏みしめ踏みしめ立つて居なければならなかつた。時々西の方で、或一處雲が薄れて、探照燈の光めいた生白い一道の明が斜に落ちて來て、深い深い井の底でも照す樣に、彼等と其足下の芝生だけ明るくする。彼等ははつと驚惶の眼を見合はす。と思ふと、怒れる神の額の如く最早眞闇に眞黑になつて居る。妻兒の顏は土色になつた。草木も人も息を屏めたかの樣に、一切の物音は絶えた。何處から來たか、犬のデカが不安の眼つきをして見上げつゝ、大きな體を主人の脚にすりつける。

空は到頭雲をかぶつて了つた。著しく水氣を含んだ北風が、ぱつ〳〵と顏を撲つて來た。やがて粒だつた雨になる。雷も頭上近くなつた。雲見の一群は、急いで家

に入つた。母屋の南面の雨戸だけ殘して、悉く戸をしめた。暗いのでランプをつけた。

ざあつと降り出した。雷が鳴る。一庭の雨脚を凄じく見せて、ピカリと電が光る。颯、颯と烈しく降り出した。

見る〳〵庭は川になる。雨が飛石をうつて刎ねかへる。目に入る限りの綠葉が、一葉々々に雨を浴びて、嬉しげにぞく〳〵身を震はして居る。

「あゝ好いおしめりだ」

斯く云つた彼等は、更に

「まだ七時前だよ、まあ」

と婢の云ふ聲に驚かされた。

夕立から本降りになつて、雨は夜すがら降つた。

（大正元年　八月十四日）

葬式

一

午前十時と云ふ觸込みなので、十一時に寺本さんの家に往つて見ると、納屋と上塗せぬ土藏の間の大きな柿の木の蔭に村の衆がまだ五六人、紙旗を青竹に結ひつけて居る。

「ドウも御苦勞さま、此方樣でも御愁傷な」

と云ふ慣例の挨拶を交はして、其の群に入る。一本の旗には「諸行無常」、一本には「是生滅法」、一本には「皆滅々己」、今一本には何とか書いてある。其上にはいづれも梵字で何か書いてある。

「お寺は東覺院ですか」

「否、上祖師ヶ谷の安穏寺です」

其安穏寺の坊さんであらう、紫紺の法衣で母屋の棺の前に座つて居るのが、此方から見える。棺は緑色の簾をかけた立派な輿に納めて、母屋の座敷の正面に据ゑてある。洋服の若い男が坊さんと相對して座つて居る。醫者であらう。左の腕に黒布を巻いた白衣の看護婦の姿が見える。

「看護婦さんも、癒つて歸るじや歸り力があるが」と誰やらが嘆息する。

時分だから上れと云はるゝので、諸君の後について母屋の表縁側から上つて、棺の置いてある十畳の次ぎの十畳に入る。頭の禿げた石山氏が、黒絹の紋付、仙臺平の袴で、若主人に代つて應對する。諸君と共に二列に差向つて、饌に就く。大きな黒塗の椀に堆く飯を盛つてある。汁椀は豆腐と茄子と油揚のつゆで、向ふに澤庵が二切つけてある。眼の凹い、鮫の歯の様な短い胡麻鹽髯の七右衛門爺さんが、年増の婦人と共に甲斐〻〻しく立つて給仕をする。一椀をやつと食ひ終へて、すべり出

る。

二

柿の木蔭は涼しい風が吹いて居る。青苔蒸した柿の幹から花をつけた雪の下が長くぶら下つて居る。若い作男が其處にあつた二臺の荷車を引きのけ、大きな鍵で土藏の戸前を開けて、蓆を七八枚出して敷いてくれた。其れに座つた者もある。足駄ばきのまゝ蹲むで話して居る者もある。彼は納屋の檐下にころがつて居る大きな木臼の塵を拂つて腰かけた。追々人が殖えて、柿の下は十五六人になつた。

「何しろむつかしい事がありや一番に飛び込まうと云ふンだからエライや」

「全くだね。寺本さんはソノ粕谷の人物ばかりじやねえ、千歳村の人物だからね」

と紺飛白で何處やら品の好い昨年母をなくした仁左衛門さんが相槌をうつ。「俺ア全くがつかりしちまつた。コウ兄か伯父見たいで、何と云ひや來ちや相談したも

ンだからな。今後何處へ往つて相談したらいゝんだか――勘さん、卿の所へでも往くだね」と縞の夏羽織を着た矮い眞黒な六十爺さんの顔を仁左衞門さんは見る。爺さんは默つて左の掌にこつ〳〵煙管をはたいて居る。

「寺本さんも、こちとら見たいに錢が無かつたから何だが、あれで金でも持つて居たらソラエライ事をやる人だつたが」と隅の方から誰やら云ふた。

「他が死にや働くなンか全くいやになつちまうね」まだ若い組の濱田の金さんが云ふ。

「いやになつたつて、死にやえゝが、生命がありや困つちまうからな」

故人の弟達や縁者の志だと云つて、代々木の酒屋の屋號のついた一升徳利が四本持ち出された。茶碗と箸と、それから一寸五分角程に切つた冷豆腐に醤油をぶつかけた大皿と、輪ぎりにした朝漬の胡瓜の皿が運ばれた。皆蓆の上に車座になつた。茶碗になみ〳〵と酒が注がれた。彼も座つて胡瓜の漬物をつまむ。羽織袴の幸

吉さんが挨拶に來た。故人の弟である。故人は丈高い苦み走つた覇氣滿々たる男であつたが、幸さんは人の好ささうな矮い男だ。一戸から一錢出した村香奠の禮を丁寧に述べて、盃を重ぬべく挨拶して立つ。

「幸さん一つ」と誰やらが茶碗をさす。

「酒どころかよ、兄貴が死んだンだ、本當に」と來た時から已に眞赤な顔して居た辰爺さん――勘さんの弟――が怒鳴る。皆がドッと笑ふ。

「兄貴が死んだンだ、本當に、酒どころかよ」と辰爺さんは呟く樣に繰りかへす。

皆好い顔になつて立上つた。村中で唯一人のチョン髷の持主、彼に對してはいつも御先生と挨拶する佐平爺さんは、荒蓆の上にころり横になつて、肱枕をしたが、風がソヨ〳〵吹くので直ぐ快い氣もちに眠つてしまつたと見え、其腫れぼつたい瞼はヒタと押かぶさつて、淺葱縞の單衣の脇がすう〳〵息つく毎に高くなり低くなりして居る。

三

母屋の方では、頻に人が出たり入つたりして居る。白襦袢、白の半股引、紺の腹掛、手拭を腰にさげた跣足の若い衆は、忙しさうに高張の白提灯の仕度をしたり、青竹のもとを鉈で削いだりして居る。

二人挽の車が泥塗になつて、入つて來た。車から下りた銀杏返の若い女は、鼠色のコオトをぬいで、草色の薄物で縁に上り、出て來た年増の女と挨拶して居る。

「井は何處ですかな」

抓むだ手拭で額の汗を拭き〳〵、眞赤になつた白襦袢の車夫の一人が、柿の木の下の群に來て尋ねる。

「井かね、井は直ぐ其裏にあるだよ、それ其處をさう往つてもえゝ、彼方へ廻つてもいかれるだ」辰爺さんが顯でしやくる。

美的百姓は木臼に腰かけたまゝ、所在なさに手近にある大麥の穗を摘むでは、掌で籾を摺つて嚙つて居る。不圖氣がつくと、納屋の檐下には、小麥も大麥も刈入れた束のまゝまだ扱きもせずに入れてある。他所では最早棒打も濟むだ家もある。此家の主人の病氣が、如何に此家の機關を停止して居たかが分かる。美的百姓も、黯い氣分になつた。此家の若主人に妻君があつたか如何か、と辰爺さんに尋ねて見た。

「まだ何もありませんや。ソラ、去年の暮に歸つて來たばかりだからね」

然だ。若主人は二年の兵役にとられて、去年の十二月初やつと歸つて來たのであつた。一人息子だつたので、彼を兵役に出したあと、五十を越した主人は分外に働かねばならなかつた。彼の心臟病は或は此無理の勞働の結果であつたかも知れぬ。尤も隨分酒は飲むで居た。故人は村の兵事係であつた。一人子でも、兵役に出すは國家に對する義務ですからと、毎に云ふて居た。若主人の留守中、彼の手助けは若

い作男であつた。故人は其作代が甲斐々々しく骨身を惜まず働く事を人毎に譽めて居た。

時が大分移つた。醉つた辰爺さんは煙管と莨入を兩手に提げながら、小さな體をやをら起して、相撲が四股を踏む様に前を明けはたげ、「のら番は何しとるだんべ。のら番を呼んで來う」と怒鳴つた。

「野良番を呼んで來う。のら番は何しとるだンべ。醉つばらつて寢てしまつたンべ」と辰爺さんは重ねて怒鳴つた。

「何、銀平さんに文ちやんだから、醉つばらつてなンか居るもンか。最早來る時分だ」仁左衞門さんが宥める。

「いや野ら番ばかりア酒が無えじややりきれねえナ。彼臭ひがな」と誰やらが云ふ。

「來た、來た、噂をすりや影だ、野ら番が來た」

墓掘番の四人が打連れて來た。

「御苦勞様でしたよ」皆が挨拶する。

「棺が重いぞ。四人じや全くやりきれねえや。八人舁きだもの」と云ふ聲がする。

勘爺さんが頷いた。「然だ〳〵、手代りでやるだな。野良番が四人に、此家の作代に、俺が家の作代に、それから石山さんの作代に、それから、七ちやんでも舁いてもらうべい」

野良番四人の爲に蓆の上に膳が運ばれた。赤兒の風呂桶大の飯櫃が持て來られる。食事半に、七右衞門爺さんが來て切口上で挨拶し、棺を舁いで御出の時襷にでもと云つて新しい手拭を四筋置いて往つた。粕谷で其子を中學二年までやつた家は此家ばかりと云ふ程萬事派手であつた故人が名殘は、斯様な事にまであらはれた。

四

「念佛でもやるべいか」

と辰爺さんが言ひ出した。「おい、幸さんとこの其兒、鉦を持て來いよ」
呼ばれた十二三の子が紐をつけた鉦と撞木を持て來た。辰爺さんはガンと一つ鳴らして見た。「こらいけねえな、斯樣な響をすらア」ガン〳〵と二つ三つ鳴らして見る。冴えない響がする。
「さあ、念佛は何にしべいか。南アまア陀ア佛にするか。ジンバラハラバイタアウンケンソバギヤアノベイロシヤノにするか」
「ジンバラハラバイタアが後生になるちうじやねいか」仁左衞門さんが眞面目に口を入れた。「辰さん、お前音頭をとるンだせ」
「呑、乃公が音頭とるべい。音頭とるべいが、皆であとやらんといけねえぞ。音頭取りばかりにさしちやいけねえぞ——ソラ、ジンバラハラバイタア」ガーンと鉦が鳴る。
「ジンバラハラバイタア——」仁左衞門さんが眞面目について行く。多くは唯笑つ

て居る。
「いかん〳〵、今時の若けい者ア念佛一つ知んねえからな。昔は男は男、女は女、月に三日宛寄つちや念佛の稽古したもンだ」辰爺さん躍起となつた。
「敎へて置かねえからだよ」若い者の笑聲が答へる。
「炬火は如何だな。おゝ、久さんが來た。久さん〳〵、濟まねえが炬火を拵へてくんな」
唇の厚い久さんは、やをら其方を向いて「炬火かね、炬火は幾箇拵へるだね？」
「短くて好えからな、四つも拵へるだな。そ、其處の麥からが好いよ」
「呑」と久さんは答へて、のそり〳〵檐下から引き出して、二握三握一つにして、トンと地につき揃へて、無雜作に小麥からで縛つて、炬火をこさへた。
「まだかな」先刻から焦々して居る辰爺さんが大聲に唸やく。
「今本膳が出てる處だからな」母屋の方を見ながら一人が辰さんを宥める。

「それはソウと、上祖師ヶ谷の彦さんは分つたかな」
「分からねえとよ。中隊でも大騒ぎして、平服で出る、制服で出る、何でも空井戸を探してるちうこンだ」
「窘められたンですかね？」
「ナニ、中隊では評判がよかつたンですよ。正直でね」
「正直者が一番危ねえだ。少し時間に後れたりすると、直ぐ無分別をやるからな」
「違へねえ」
皆一寸默つた。
辰爺さんは、美的百姓に大きな聲で囁やいた。「岩もね、上等兵の候補者になりましたつてね」
「然かね。岩さんは何處に往つても可愛がられる男だよ」

「毎月ね、」辰爺さんは聲を落して囁いた。「毎月ね、三圓宛やりますよ。それから兄の所から三圓宛ね、くれますよ。ソレ小遣が足りねえと、上祖師ヶ谷の様にならアね」
「月に六圓宛、其れは大變だね」
「岩もね、其當座は腹が減つて困つたてこぼして居ましたつけ。何しろ麥飯の七八杯もひつかけて居つたンだからね。酒保に飛んで行き〳〵したつて話してました。今ぢや大きに樂になつたつてますよ。最早あと一年半で歸つて來ますだよ」
農家から大切な働き男を取つて、其上間接に小使としての稅金を金の乏しい農村から月々六圓もとる兵役と云ふものについて、美的百姓は大に考へざるを得なかつた。

五

母屋では、最早仕度が出來たと見え、棺が縁の方に舁き出された。柿の木の下では、寢た者も起き、總立になつた。手々に白張提灯を持つたり、紙の幟を握つたり、炬火をとつたりした。辰爺さんはやをら煙草入を腰に挿して鉦と撞木をとつた。

「旗が先に行くかね、提灯かね？」

「冥土の案内じや提灯が先だんべ」

「東京じや旗が先きに行くやうだね、ねえ先生」

「東京は東京、粕谷は粕谷流で行かうじやねえか」と誰やらの聲。

「炬火が一番先だよ」

「應、然だ、炬火が一番先だ」

白無垢を着た女達が、緣から下りて草履をはいた。其草履は墓地でぬぎ棄てるので、歸途の履物がいる。大きな目籠に駒下駄も空氣草履も泥だらけの木履も一つに

ぶち込むで、久さんが背負つて居る。

「南無阿彌陀ア佛」

辰爺さんが音頭をとりながら先に立つ。鉦がガアンと鳴る。講中が「南無阿彌陀ア佛」と和する。鉦、炬火、提灯、旗、それから兵隊歸りの喪主が羽織袴で位牌を捧げ、其後から棺を藏めた輿は八人で舁かれた。七さんは着流しに新しい駒下駄で肩を入れて居る。此邊には滅多に見た事も無い立派な輿だ。白無垢の婦人、白衣の看護婦、黒い洋服の若い醫師、急拵への紋を透綾の羽織に張つた親戚の男達、其等が棺の前後に附添ふた。大勢の子供や、子守が跟いて來る。婆さんかみさんが皆出て見る。

昨夜の豪雨は幸にからり霽れて、道も大抵乾いて居る。風が南からソヨ〳〵吹いて、「諸行無常」「是生滅法」の紙幟がヒラ〳〵靡く。「南無阿彌陀ア佛——南無阿彌陀ア佛」單調な村の哀の譜は、村の靜寂の中に油の樣に流れて、眠れよ休めよと云

ふ様に棺を墓地へと導く。

葬列は滯なく、彼が家の隣の墓地に入つた。此春墓地擴張の相談がきまつて、三畝餘りの小杉山を拓いた。其杉を買つた故人外二名の人々が、大きな分は伐つて賣り、小さなのは三人で持つて來て彼の家に植ゑてくれた。其れは唯三月前の四月の事であつた。其れから最早墓が二つも殖えた。二番目が寺本さんである。

墓地の樒の木に障るので、若い洋服の醫師が手を添へて枝を擡げたりして、棺は掘られた墓の前に据ゑられた。輿を解くのが一仕事、東京から來た葬儀社の十七八の若者は、眞赤になつてやつと輿をはづした。白木綿で卷かれた柩は、荒繩で縛られて、多少の騷ぎと共に穴の中に下された。野良番は鍬をとつた。どさりと赤土の塊が柩の上に落ちはじめた。

「皆入れてしまふとよ」囁き合ふて、行列の先頭に來た紙幟は青竹からはづして、柩の上に投げ込まれた。

土がまたドサ〳〵落ちる。

* * *

葬式の五日目に、話題に上つた上祖師ヶ谷の行衞不明の兵士の消息を乳屋が告げた。兵士の彦さんは縊死したのであつた。代々木の山の中に、最早腐りかけて、兩眼は烏につゝかれ、空洞になつて居たさうだ。原因は分らぬが、彦さんの實父は養子で、彦さんの母に追出され、今の爺は後夫と云ふ事であつた。

田川

最初近いと聞いた多摩川が、家から一里の餘もある。玉川上水すら半里からある。好い水の流れに遠いのが、幾度も繰り返へさるゝ失望であつた。つい其まゝに住むことになつたが、流水があつたらと思はぬことは無い。せめて掘抜井でも掘らうかと思ふが、經驗ある人の言によると、此附近では曾て多額の費用をかけて掘つた人があつて、水は地面まで來るには來たが、如何しても噴き上らぬと云ふのである。水の樂は、普通の井と、家内に居ては音は聞こえぬ附近の田川で滿足しなければならぬ。

彼の家から五六丁はなれて品川堀がある。品川へ行く灌漑專用の堀川で、村の爲には洗滌の用にしかならぬ。一昨々年の夏の出水に、村内で三間ばかり堤防が崩れ、堤から西は一時首まで浸る程の湖水になり、村總出で防水工事をやつた。曾て村の

田川

小兒が溺死したこともあつて、村の爲にはあまり有り難くもない水である。品川堀の外には、彼が家の下なる谷を西から東へ流るゝ小さな田川と、八幡田圃を北から南東に流るゝ大小二筋の田川がある。

彼の屋敷下の小さな谷を流るゝ小川は、何處から來るのか知らぬが、冬は大抵涸れて了ふ。其かはり夏の出水には堤を越して畑に溢れる。其樣な時には、村の子供が大喜悅で、キャッ〳〵騷いで泳いで居る。本當の畑水練である。農としては出水を憂ふべきだが、遊び好きの[illegible]に於て村の惡太郎等に劣るまじい彼は、畑を流るゝ濁水の音颯々として松風の如く心耳一爽の快を先づ感じて、尻高々とからげ、下駄ばきでざぶ〳〵渡つて見たりして、其日限りに水が落ちて了ふのを毎に殘念に思ふのである。兎に角此氣まぐれな小川でも、これあるが爲に少しは田も出來る。堤の萱や葭は青々と茂つて、殊更丈も高い。これあるが爲に、夏は螢の根據地ともなる。朝から晩までべちやくちやゝ囀る葭原雀の隱れ家にもなる。五月雨の夜にコトコ

ト叩く水雞の宿にもなる。

八幡田圃を流るゝ田川の大きな方を、此邊では大川と云ふ。一間幅しかない大川で、玉川淨水を分つた灌漑用水である。此水あるが爲に、千歳村から世田ヶ谷かけて、何百町の田が出來る。九十一歳になる彼の父は、若い頃は村吏縣官として農政には深い趣味と經驗を有つて居る。其子の家に滯留中此田川の畔を歩いて、熟々と水を眺め、喟然として「仁水だ喃」と嘆じた。趣味を先づ第一に見る其子の爲にも不仁の水とは云はれない。此水あるが爲に田圃がある。春は紫雲英の花氈を敷く。淋しい村を賑はして蛙が鳴く。朝露白い青田の涼しさも、黄なる日の光を震はして蝗飛ぶ秋の田の豐けさに伴ふさま〳〵の趣も、此水の賜ものである。こゝにこの水流るゝがために、水を好む野茨も心地よく其の涯に茂つて、麥が熟れる頃は枝も撓に芳しい白い花を被る。薄紫の嫁菜の花や、薄紅の犬蓼や、いろ〳〵の秋の草花も美しい。鮒や鰌を子供が捕る。水底に影を曳いて、メダカが游ぐ。ドブンと音して

蛙が飛び込む。稀にはしなやかな小さな十六盤橋を見せて、二尺五寸の蛇が渡る。田に入るとて水を堰く頃は、高八寸のナイヤガラが出來て、蛙の聲にまぎらはしい音を立てる。玉川に行くかはりに子供はこゝで浴びる。「蘆の芽や田に入る水も隅田川」然だ。彼の村を流るゝ田川も、やはり玉川、玉川の孫であつた。祖父樣の玉川の水が出る頃は、この孫川の水も灰がゝつた乳色になるのである。乞食は時々こゝに浴びる。去年の夏は照がつゞいたので、村居六年はじめて雨乞を見た。八幡に打寄つて村の男衆が、神酒をあげ、「六根清淨……懺悔〻〻」と叫んだあとで若い者が褌一つになつて此二間幅の大川に飛び込み、肩から水を浴びて「六根清淨」……何とかして「さんげ〻〻〻」と口々に叫むだ。其聲は舜旻天に號泣する聲の如くいぢらしく耳に響いた。霜の朝など八幡から眺めると、小川の上ばかり水蒸氣がほうつと白く騰つて、水の行衛が田圃はるかに指さゝれる。

筧の水音を枕に聞く山家の住居。山雨常に來るかと疑ふ溪聲の裡。平時は汪々と

して聲なく音なく、一たび怒る時萬雷の崩るゝ如き大河の畔。裏に鳧を飼ひ門に舟を繫ぐ江湖の住居。色と動と音と千變萬化の無盡藏たる海洋の邊。野に饜いた彼には、此等のものが時々幻の如く立現はれる。然しながら假にサハラ、ゴビの一切水に緣遠い境に住まねばならぬとなつたら如何であらう。また竈に蛭這ひ蛇寢床に潛る水國卑濕の地に住まねばならぬとなつたら如何であらう。中庸は平凡である。然し平凡には平凡の意味があり强味がある。

田川の水よ。儞に筧の水の幽韻はない。雪氷を融かした山川の清冽は無い。瀑布の咆哮は無い。大河の溶々は無い。大海の汪洋は無い。儞は謙遜な農家の友である。高慢な心の角を折り、騷がしい氣の遽たゞしさを抑へて、心靜に儞の聲低く語る敎訓を聽かねばならぬ。

驟雨浴

兩三日來、西の地平線上、甲相武信の境を造くる連山の空に當つて、屢々黑雲が立つた。遠寄の太鼓の樣に雷も時々鳴る。黑雲の幕の中で、ぱつ〳〵と火花を散す樣に、電光も射す。夕立が來ると云ひながら、一滴も落ちずして二三日過ぎた。

土用太郎は凉しい彼の家でも九十一度と云ふ未曾有の暑氣であつた。土用二郎の今日は、朝來少し曇つたが、風と云ふものはたと絕え、氣溫は昨日程上つて居ないにも拘はらず、脂汗が流れた。

晝飯を食つて汗になつたので、天日で湯と沸いて居る庭の甕の水を浴び、籐の寢臺に横になつて新聞を見て居る內に、快い心地になつて眠つて了ふた。

一寢入して眼をさますと、室內が暗くなつて居る。時計を見ると、まだ二時廻つたばかりである。緣側に出て見た。南の方は明るく、午後二時の日がかん〳〵照つ

て居るが、西の方が大分暗い。近村の二本松を前景にして、いつも近くは八王子在の高尾小佛、遠くて甲州東部の連峰が見ゆるあたりだけ、卵色の横幕を延いた様に妙に黄色になり、其上層は人を脅す様な眞黯い色をして居る。西北の空が眞暗になつて、甲州の空の根方のみ妙に黄朱を抹つた様になる時は、屹度何か出て來る。已に明治四十一年の春の暮、成人の握掌大の素晴しい雹が降つた時も然だつた。斯う思ひながら縁から見て居ると、頭上の日はカン〳〵照りながら、西の方から涼しいと云ふより寧冷たい氣が吻々と吹つかけて來る。彼の家から、東は東京、南は横濱、夕立は滅多に其方からは來ぬ。夕立は矢張西若くは北の山から來る。山から都へ行く途中、彼が住む野の村を過ぎるのである。

西は本氣に曇つた。雷様も眞面目に鳴り出した。最早多摩川の向ふは降つて居るのであらう。彼は大急ぎで下りて、庭に乾してあつた仕事着やはだし足袋を取り入れた。歸つて北の窓をあけると、面が冷やりとした。北の空は一面鼠色になつて居

る。日傭のおかみが大急ぎで乾し麥や麥からを取り入れて居る。

北の硝子窓をしめて、座敷の南縁に立つて居ると、ぽつりと一つ大きな白い粒が落ちて、乾いて黄粉の様になつた土にころりところむだ。

「來たぞ、來たぞ」

四十五歳の髯男、小供か小犬の様に嬉しい豫期氣分になつて見て居ると、そろそろ落ち出した。大粒小粒、小粒大粒、かはる〳〵斜に落ちては、地上にもんどりうつて團子の様にころがる。二本松のあたり一抹の明色は薄墨色に搔き消されて、推し寄せて來る白い驟雨の進行が眼に見えて近づいて來る。

彼は久しく羨むで居た。熱帶を過ぐる軍艦の甲板で、海軍の將卒が折々やると云ふ驟雨浴「總員入浴用意！」の一令で、手早く制服をぬぎすて、石鹼とタオルを兩手に抓んで、眞黒の健兒共がずらり甲板に列んだ處は、面白い見ものであらう。やがて雷鳴電光よろしくあつて、錨索大の雨の棒が瀑布落しに撞々と來る。さあ、今

だ。總員鶩の如くきやッ〳〵笑ひ騒いで、大急ぎで石鹸を塗る、洗ふ。大洋の眞中で大無錢湯が開かれるのだ。愚圖々々すれば、石鹸を塗つたばかりの斑人形を殘して、いたづらな驟雨はざあと駈けぬけて了ふ。四方水の上に居ながら、バケツ一ぱいの淡水にも中々ありつかれぬ海の子等に、蒸溜水の天水浴とは、何等贅澤の沙汰であらう。世界一の豪快は、甲板の驟雨浴であらねばならぬ。

不幸にして美的百姓氏は、海上ならぬ陸上に居る。熱帶ならぬ溫帶に居る。壯快限り無い甲板の驟雨浴は眞似られぬが、自己流の驟雨浴なら出來ぬことは無い。やつて見るかな、と思ふて居ると、妻兒が來た。彼は手早く浴衣をぬいで眞裸になり、突と走り出て、芝生の眞中に棒立ちに立つた。

ポトリ肩をうつ。腦天まで冷やりとする。またぽとり。ぽと〳〵ぽと〳〵。其たびに肩や腹や背が冷やり〳〵とする。好い氣もちだ。然しまだ夕立の先手で、手痛くはやつて來ぬ。

「此れをかぶつていらつしやいな」

と云つて、妻は硝子の大きな盂を持て來た。硝子は電氣を絶緣する、雷よけのまじないにかぶれと謂ふのだ。諾と受取つて、いきなり頭にかぶつた。黑眼鏡をかけた毛だらけの裸男が、硝子鉢を冠つて、直立不動の姿勢をとつたところは、新式の河童だ。不圖思ひついて、彼は頭上の硝子盂を上向けにし、兩手で支へて立つた。一つ二つと三十ばかり數ふると、取り下ろして、ぐつと一氣に飲み乾した。やはらかな天水である。二たび三たび興に乘じて此大觴を重ねた。

「もう上つていらつしやいよ」

妻兒が呼ぶ頃は、夕立の中軍まさに殺到して、四圍は眞白い闇になつた。電がピカリとする。雷が頭上で鳴る。ざあざあつと落ち來る太い雨に身の內撲たれぬ處もなく、ぐつと息が詰まる。驟雨浴もこれまでと、彼は瀧の如く迸る樋口の水に足を洗はして、身震ひして緣に飛び上つた。

上ると土砂降りになつた。庭の平たい甕の水を雨が亂れ撲つて、無數の魚兒の喰
喁する様に跳ね上つて居たが、其れさへ最早見えなくなつた。
「呀、緣が」
と妻が叫んだ。南西からざアつと吹かけて來て、緣は忽川になつた。妻と婢は遽
てゝ書院の雨戸をくる。主人は障子、廊下の硝子窓をしめてまはる。一切の物音は
絶えて、唯ざあと降る音、ざあつと吹く響ばかりである。忽珂璨と硝子戸が響い
た。また一つ珂璨と響いた。雹である。彼はまだ裸であつた。飛び下りて、雨の中
から七八つ白いのを拾つた。あまり大きなのではない。小指の尖位なのである。透
明、不透明、不透明の核をもつた半透明のもある。主人は二つ食つた。妻は五六個
食つた。齒が痛い程冷たい。
座敷の緣は川になつた。母屋の疊は濕る程吹き込むだ。家内は奥の奥まで冷たい
水氣がほしいまゝにかけ廻はる。

「あゝ好い夕立だ。降れ、降れ、降れ、降れ」
斯う呼はつて居る内、夜の明くる様に西の空が明るくなり出した。霽際の纖い雨
が、白い絹糸を閃めかす。一足緣へ出て見ると、東南の空は今眞闇である。最早夕
立の先手が東京に攻め寄せた頃である。二百萬の人の子の遽てふためく狀が見える
様だ。
何時の間にかばつたり雨は止むで、金光嚴しく日が現はれた。見る〳〵地面を流
るゝ水が止まつた。風がさあつと西から吹いて來る。庭の翠松がばら〳〵と雫を散
らす。何處かでキリン〳〵と蜩が心地よく鳴き出した。
時計を見ると、二時三十分。夕立は唯三十分つゞいたのであつた。
浴衣を引かけ、低い薩摩下駄を突かけて畑に出た。さしもはしやいで居た畑の土
がしつとりと濕ふて、玉蜀黍の下葉やコスモスの下葉や、刎ね上げた土まみれにな
つて、身重げに低れて居る。何處を見ても、うれしさうに綠がそよいで居る。東の

方では雷がまだ鳴つて居る。

「虹收仍白雨、雲動忽青山」

斯く打吟じつゝ西の方を見た。高尾、小佛や甲斐の諸山は、一風呂浴びて、濃淡の碧鮮やかに、富士も一筋白い竪縞の入つた淺葱の浴衣を着て、すがすがしく笑むで居る。

キリン、キリンキリン！

蜩がまた一聲鳴いた。

隣家の主人が女兒を負つて畑廻はりをして居る。

「好いおしめりでございました」

と云ふ挨拶を、透垣越しに取りかはす。

二時間ばかりすると、明日は「おしめり正月」との言ひつぎが來た。

詩篇を出して、大聲に第六十五篇を朗詠する。

『爾地にのぞみて水そゝぎ、大に之をゆたかにし玉へり。神の川に水滿ちたり。爾かくそなへをなして、穀物をかれらにあたへたまへり。爾畎を大にうるほし、畝をたひらにし、白雨にてこれをやはらかにし、その萌え出づるを祝し、また恩惠をもて年の冕弁としたまへり。爾の途には膏したゝれり。その恩滴は野の牧場をうるほし、小山はみな歡びにかこまる。牧場は皆羊の群を衣、もろ〳〵の谷は穀物におほはれたり。彼等は皆よろこびてよばはりまた謳ふ。』

（明治四十五年　七月廿一日）

村芝居

裏の八幡で村芝居がある。

一昨日は、一字の男總出で、隣村の北澤から切組舞臺を荷車で挽いて來た。昨日は終日舞臺かけで、村で唯一人の大工は先月來仕かけて居る彼が家の仕事を休むで舞臺や棧敷をかけた。今夜は愈芝居である。

十一月も深い夜の事だ。外套を來て、彼等夫妻は家を空虛にして出かけた。

平生から暗くて淋しい八幡界隈が、今夜は光明世界人間の顏の海に化けて居る。八幡横手の阪道から、宮裏の雜木林をかけて、安小間物屋、鮨屋、柿蜜柑屋、大福駄菓子店、おでん店、ずらりと並んで、カンテラやランプの油煙を眞黑に立てゝ、人聲がや〳〵噪いで居る。其中を縫ふて、宮の横手に行くと、山茶花小さな金剛纂なぞ植ゑ込んだ一寸した小庭が出來て居て、ランプを入れた燈籠が立ち、杉皮葺の

假屋根の下に墨黑々と「彰忠」の二大字を書いた板額が掲つて居る。然る可き目的がなければ村芝居の興行は許されぬと云ふ其筋の御意ださうで、此度の芝居も村の諸君が智慧をしぼつて、日露戰役記念の爲とこじつけ、漸く役場や警察の許可を得た。其れについて幸ひ木目見事の欅板があるので、戰役記念の題字を書いてくれと先日村の甲乙が彼に持込んで來たが、書くが職業と云ふ條あまりの名筆故彼は辭退した。そこで何處かの坊さんに賴んださうだが、坊さんは佳墨がなければ書けぬと云ふたさうで、字を書かぬなら墨を貸してくれと村の人達が墨を借りに來た。幸ひ持合せの些泥臭いが見かけは立派な圓筒形の大きな舶來唐墨があつたので、快く用立てた。今夜見れば墨痕美はしく「彰忠」の二字に化つて居る。

拜殿には、村の幹部が、其ある者は紋付羽織など引かけて、他村から來る者に挨拶したり、机に向つて奉納寄進のビラを書いたりして居る。「さあ此方へ」と招かれる。ビラを書いてくれと云ふ。例の惡筆を申立てゝ逃げる。

拜殿から見下ろすと、驚く可し、東向きのだら〳〵坂になつて居た八幡の境内が、何時の間にか歌舞伎座か音樂學校の演奏室の樣な次第高の立派な觀劇場になり濟ました。坂の中段もとに平生並んで居る左右二頭の唐獅子は何處へか擔ぎ去られ、其あとには中々馬鹿にはならぬ舞臺花道が出來て居る。棧敷も左右にかいてある。拜殿下から舞臺下までは、次第下りに一面莚を敷きつめ、村はもとより他村の老若男女彼此四五百人も、ぎつしり詰まつて、煙草を喫つたり、話したり、笑つたり、晴れと着飾つた銀杏返しの娘が、立つて見たり座つたり、棧敷からつるした何十と云ふランプの光の下にがや〳〵どよめいて居る。無論屋根が無いので、見物の頭の上には、霜夜の星がキラ〳〵光つて居る。舞臺横手のチョボの床には、見た樣な朝鮮籠が下つて居ると思ふたは、其れは若い者等が彼の家から徵發して往つた籠であつた。花道には、一金何十錢也船橋何某樣、一金何十錢也廻澤何某樣と隙間もなくびらを貼つた。引切りなしに最寄の村々から紋付羽織位引かけた人達がやつて來る。

拜殿の所へ來て、「今晩は御芽出度う、此はホンの何ですが」と紙包を出す。幹部が丁寧に答禮して、若い者を呼び、棧敷や土間に案内さす。ビラを書く紙がなくなつた、紙を持て來うと幹部が呼ぶ。素通し眼鏡をかけたイナセな村の阿哥が走る。「ありや好い男だな」と他村の者が評する。耳の届く限り洋々たる歡聲が湧いて、理屈屋の石山さんも今日はビラを書き〳〵莞爾〳〵上機嫌で居る。

彼等の來樣が些晩かつたので、三番叟は早や濟むで居た。伊賀越の序幕は、何が何やら分からぬ間に過ぎた。彼等夫妻も拜殿から下りて、土間に割り込み、今幕があいた沼津の場面を眺める。五十圓で買はれて來た市川某尾上某の一座が、團十菊五芝翫其方退けとばかり盛に活躍する。お米は近眼の彼には美しく見えた。お米の手に持つ菊の花、飾つた菊の植木鉢、それから借金取が取つて掃き出す手箒も、皆彼の家から若者等が徵發して往つたのである。分かるも、分からぬも、觀客は口あんごりと心も空に見とれて居る。平作は好かつた。隣に座つて居る彼が組頭の惠比

壽顏した爺さんが眼を霑まして見て居る。頭上の星も、霜夜も、座下の荒莚も忘れて、彼等もしばし忘我の境に入つた。やがてきりゝゝと舞臺が廻る。床下で若者が五人がゝりで廻すのである。村芝居に廻り舞臺は中々贅澤なものだ。

次ぎは直ぐ仇討の幕になつた。狹い舞臺にせゝこましく槍をしごいたり眉尖刀を振つたり刀を振り廻したりする人形が入り亂れた。唐木政右衞門が二刀を揮つて目ざましく働く。「あの腰付を御覽なさい」と村での通人仁左衞門さんが嘆美する。「星合團四郎なンか中々强いやつが向ふ方に居るのですからナ」と講談物仕入れの智識をふり廻す。

夜は最早十二時。これから中幕の曾我對面がある。彼等は見殘して、留守番も火の氣も無い家に歸つた。平作やお米が踊る彼等が夢の中にも、八幡の賑合は夜すがら海の音の樣に響いて居た。

（明治四十年　十一月）

夏の頌

一

夏は好い。夏が好い。夏ばかりでも困らうが、四時春なンか云ふ天國は平に御免を蒙る。米國加州人士の中には、わざゝゝ夏を迎へに南方に出かける者もあるさうな。不思議はない。

夏は放膽の季節だ。小心怯胆屑々乎たる小人の彼は、身をめぐる自然の豪快を假つて、纔に自家の氣焰を吐くことが出來る。排外的に立籠めた戸障子を思ひきり取り拂ふ。小面倒な着物なンか脱いでしまふて、毛深い體丸出しの赤裸々黑條々をきめ込む。大抵の客には裸體若くは半裸體で應接する。一夏過ぎると、背も腹も手足も、海邊に一月も過した樣に眞黑になる。臆病者も頗英雄になつた氣もちだ。夏の

快味は裸の快味だ。裸の快味は懺悔の快味だ。さらけ出した體の土用干、靈魂の煤掃き、あとの清々しさは何とも云へぬ。起きぬけに木の下で冷たい水蜜桃をもいでがぶりと喰ひついたり、朝露に冷え切つた水瓜を畑で拳固で破つて食ふたり、自然の子が自然に還る快味は言葉に盡せぬ。

彼が家では、夏の夕飯をよく芝生でやる。椅子テーブルのこともあり、蓆を敷いて低い食卓の事もある。金を爍かす日影椎の梢に殘り、芝生はすでに蔭に入り、蜩の聲何處からともなく流れて來ると、成人も子供も嬉々として青芝の上の晩餐の席に就くのである。犬や猫が、主人も大分開けて我黨に近くなつた、頗話せると云つた樣な顏をして、主人の顏と食卓の上を等分に見ながら、おとなしく傍に附いて居る。毎常の夕飯がうまく喰はれる、永くなる。梢に殘つた夕日が消えて、樺色の雲が一つ波立たぬ海の樣な空に浮いて居る。夏の夕明は永い。まだ暮れぬ、まだ暮れぬ、と思ふ間に、其まゝすうと明るくなりまさる、眼をあげると、何時の間にか頭

の上にまん丸な月が出て居て、團欒の影黑く芝生に落ちて居る。

二

強烈な日光の直射程痛快なものは無い。日蔭幽に笑む白い花もあはれ、曇り日に見る花の和かに落ちついた色も好いが、眞夏の赫々たる烈日を存分受けて精一ぱい照りかへす花の色彩の美は何とも云へぬ。彼は色が大好きである。緋でも、紅でも、黃でも、紫でも、碧でも、凡そ色と云ふ色皆焰と燃え立つ夏の日の花園を、經木眞田の帽一つ、眞裸でぶらつく彼は、色の宴、光の浴に恍惚とした醉人である。彼は一滴の酒も飲まぬが、彼は色にはタワイもなく醉ふ。曾て戯れにある人のはがき帖に、

此身蝶にもあるまじけれど
わけもなくうれしかりけり日は午なる

眞夏の園の花のいろ〳〵

三

變化の鮮やかは夏の特色である。彼の鄕里熊本などは、晝間は百度近い暑さで、夜も油汗が流れてやまぬ程蒸暑い夜が少くない。蒲團なンか滅多に敷かず、蓆一枚で、眞裸に寢たものだ。此樣でも困る。朝顏の花一ぱいにたまる露の朝涼、岐阜提灯の火も消えがちの風の晩冷、涼しさを聲にした樣な蜩に朝涼夕涼を宣らして、日間は草木も人もぐつたりと凋るゝ程の暑さ、晝夜の懸隔する程、夏は好いのである。

ヒマラヤを五も積み重ねた雲の峰が見る間に崩れ落ちたり、濃いインキの一點を天の一角にうつた雲が十分間に全天空を鼠色に包むだり、電を閃かしたり、雹を撒いたり、雷を鳴らしたり、夕立になつたり、虹を見せたり。而して急に靑空になつ

たり、分秒を以てする天空の變化は、眼にもとまらぬ早わざである。夏の天に目ざましい變化があれば、夏の地にも鮮やかな變化がある。尺を得れば尺、寸を獲れば寸と云ふ信玄流の月日を送る田園の人も、夏ばかりは謙信流の一氣呵成を作物の上に味はふことが出來る。生憎草も夏は育つが、さりとて草ならぬものも目ざましく繁る。煙管啣へて、後手組んで、起きぬけに田の水を見る辰爺さんの眼に、露だらけの早稻が一夜に一寸も伸びて見える。昨日花を見た茄子が、明日はもうもげる。瓜の蔓は朝々伸びて、とめてもとめても心をとめ切れぬ。二三日打つちやつて置くと、甘藷の蔓は八重がらみになる。如何に一切を天道樣に預けて、時計に用がない百姓でも、時には斯樣なはき〳〵した成績を見なければ、だらけてしまふ。夏は自然の「ヤンキーズム」だ。而して此夏が年中で、正月元日浴衣がけで新年御芽出度も困りものだが、此處らの夏はぐず〳〵するとさつさと過ぎてしまふ位なので、却つてよいのである。

四

夏の命は水だが、川らしい川に遠く、海に尙遠い斯野の村では、水の樂が思ふ樣にとれぬ。

昨年の夏、彼は大きな甕を買つた。徑三尺、深さは唯一尺五寸の平たい甕である。これを庭の芝生の端に据ゑて、毎朝水晶の樣な井の水を盈たして置く。大抵大きなバケツ八はいで溢るゝ程になる。水氣の少い野の住居は、一甕の水も琵琶洞庭である。太平洋大西洋である。書齋から見ると、甕の水に靑空が落ちて、其處に水中の天がある。時々は白雲が浮く。空を飛ぶ五位鷺の影も過ぎる。風が吹くと漣が立つ。風がなければ琅玕の如く凝つて居る。

日は段々高く上り、次第に熱して來る。一切の光熱線が悉く此徑三尺の液體天地に投射せらるゝかと思はれる。冷たく井を出た水も、日の熱心にほだされて、段々

冷たくなくなる。生溫くなる。所謂日なた水になる。正午の頃は最早湯だ。非常に暑い日は、甕の水もうめ水が欲しい程に沸く。

午後二時三時の交は、涼しいと思ふ彼の家でも、九十度にも上る日がある。風がぱつたり止まる日がある。晝寢にも飽きる。新聞を見るすらいやになる。此時だ、此時彼は例の通り素裸で薩摩下駄をはき、手拭を持つて、突と庭に出る。日ざかりの日は、得たりや應と眞裸の彼を目がけて眞向から白熱箭を射かける。彼は遽てず騷がず悠々と芝生を歩むで、甕の傍に立つ。先眼鏡をとつて、ドウダンの枝にのせる。次ぎに褌をとつて、春モミヂの枝にかける。手拭を右の手に握り、甕から少しはなれた所に下駄を脫いで、下駄から直に大胯に片足を甕に踏み込む。呀、熱、と云ひたい位。つゞいて一方の足も入れると、一氣に撞と尻餅搗く樣に坐わる。甕の緣を越して、水がざあつと溢れる。彼は悠然と甕の中に坐つて、手拭を濡らして、頭から面、胸から手と、ゆる〳〵洗ふ。水はます〳〵溢れて流れる。乾いた庭に夕

立のあとの如く水が流れる。油斷をした蟻や螻が泡を喰つて逃げる。逃げおくれて流される。彼は好い氣もちになつて、ぢいと眼をつぶる。眼を開いて徐に見廻はす。上には青天がある。下には大地がある。中には赤裸の彼がある。見物人は、太陽と雀と蟲と樹と草と花と家ばかりである。時々は褌の洗濯もする。而してそれを楓の枝に曝らして置く。五分間で火熨斗をした様に奇麗に乾く。

十分十五分ばかりして、甕を出る。濡手拭を頭にのせたまゝ、四體は水の滴るゝまゝに下駄をはいて、今母の胎内を出た様に眞裸で、天上天下唯我獨尊と云ふ様な大踏歩して庭を歩いて歸る。歸つて縁に上つて、手拭で悉皆體を拭いて、尙暫くは縁に眞裸で立つて居る。全く一皮脱いだ様で、己が體のあたりばかり涼しい氣がそよぐ。縁から見ると、七分目に減つた甕の水がまだ搖々して居る。其れは夕蔭に、乾き渇いた鉢の草木にやるのである。稀には彼が出たあとで、妻兒が入ることもある。青天白日、庭の眞中で大びらに女が行水するも、田舍住居のお蔭である。

夏は好い。夏が好い。

低い丘の上から

一

彼は毎に武藏野の住民と稱して居る。然し實を云へば、彼が住むあたりは、武藏野も場末で、景が小さく、豪宕な氣象に乏しい。眞の武藏野を見るべく、彼の家から近くて一里强北に當つて居る中央東線の鐵路を踏み切つて更に北せねばならぬ。武藏野に住んで武藏野の豪宕莽蒼の氣を領することが出來ず、且居常流水の音を耳にすることが出來ぬのが、彼の毎々繰り返へす遺憾である。然し緣なればこそ來て六年も住むだ土地だ。平凡は平凡ながら、平凡の趣味も萬更捨てたものでもない。

彼の住居は、東京の西三里、玉川の東一里、甲州街道から十丁程南に入つて、北多摩郡中では最も東京に近い千歲村字粕谷の南耕地と云つて、昔は追剝が出たの、

大蛇が出て婆が腰をぬかしたのと傳說がある德川の御林を、明治近くに拓いたものである。林を拓いて出來た新開地だけに、いづれも古くて三十年二十年前株を分けてもらつた新家の部落で、粕谷中でも一番新しく、且人家が殊に疎な方面である。就中彼の家は此新部落の最南端に一つ飛び離れて、直ぐ東隣は墓地、生きた隣は背戶の方へ唯一軒、加之小一丁からある。田圃向ふの丘の上を通る靑山街道から見下ろす位の低い丘だが、此方から云へば丘の南端に彼の家はあつて、東一帶は八幡の森、雜木林、墓地の木立に塞がれて見えぬが、南と西とは展望に障るものなく、小さなパノラマの樣な景色が四時朝夕眺められる。

二

三鷹村の方から千歲村を經て世田ヶ谷の方に流るゝ大田圃の一の小さな枝が、入江の如く彼が家の下を東から西へ入り込むで居る。其西の行きどまりは築き上げた

品川堀の堤の藪だたみになつて、其上から遠村近落の樫の森や松原を根占にして、高尾小佛から甲斐東部の連山が隱見出沒して居る。冬は白く、春は夢の樣に淡く、秋の夕は紫に、夏の夕立後はまさまさと青く近寄つて來る山々である。近景の大きな二本松が此山の鏈を突破して居る。

此山の鏈を傳ふて南東へ行けば、富士を冠した相州連山の御國山から南端の鋭い頭をした大山まで唯一目に見られる筈だが、此邊で所謂富士南に豪農の防風林の高い杉の森があつて、正に富士を隱して居る。少し杉を伐つたので、冬は白いものが人を焦らす樣にちら〳〵透いて見えるのが、却て懊惱の種になつた。あの杉の森がなかつたら、と彼は幾度思ふたかも知れぬ。然し此頃では唯其杉の伐られんことを是れ恐るゝ樣になつた。下枝を拂つた百尺もある杉の八九十本、鬱然として風景を締めて居る。斯杉の森がなかつたら、富士は見えても、如何に淺薄の景色になつてしまつたであらう。春雨の明けの朝、秋霧の夕、此杉の森の梢がミレージの樣に靄

から浮いて出たり、棚引く煙を紗の帶の如く纏ふて見たり、しぶく小雨に見る〳〵淡墨の畫になつたり、梅雨には梟の宿、晴れた夏には眞先に蜩の家になつたり、雪霽には青空に劃然と聳ゆる玉樹の高い梢に百點千點黑い鴉をとまらして見たり、秋の入日の空樺色に曛ずる夕は、濃紺濃紫の神祕な色を湛へて梢を距る五尺の空に唯一つ明星を煌めかしたり、彼の杉の森は彼に盡きざる趣味を與へてくれる。

三

彼の家の下なる淺い横長の谷は、畑が重で、田は少しであるが、此入江から本田圃に出ると、長江の流るゝ樣に田が田に連なつて居る。まだ北風の寒い頃、子を負つた跣足の女の子が、小目籠と庖刀を持つて、芹、嫁菜、薺、野蒜、蓬、蒲公英なぞ摘みに來る。紫雲英が咲く。蛙が鳴く。膝まで泥になつて、巳之吉亥之作が田螺拾ひに來る。簑笠の田植は骨でも、見るには畫である。螢には赤い火が夏の夜にち

ら〳〵するのは、子供が鮹突きして居るのである。一條の小川が品川堀の下を横に潜つて、彼の家の下の谷を其南側に添ふて東へ大田圃の方へと流れて居る。最初は女竹の藪の中を流れ、それから稀に葭を交へた萱の茂る土堤の中を流れる。夏は青々として眼がさめる。葭切、水鷄の棲家になる。螢が此處からふらりと出て來て、田面に亂れ、墓地を飛むでは人魂を眞似て、時々は彼が家の蚊帳の天井まで舞ひ込む。夏は翡翠の屏風に光琳の筆で描いた様に、青萱まじりに萱草の赭い花が咲く。萱、葭の穗が薄紫に出ると、秋は此小川の堤に立つ。それから日に〳〵秋風をこゝに見せて、其薄紫の穗が白く、青々とした其葉が黄ばみ、更に白らむ頃は、漬菜を洗ふ七ちやんが舌鼓うつ程、小川の水は淺くなる。行く〳〵年闌けて武藏野の冬深く、枯るゝものは枯れ、枯れたものは乾き、風なき日には光り、風ある日にはがさ〳〵と人が來るかの様に響く。其内ある日近所の辰さん兼さんが簌々簌々と音さして悉皆堤の上のを苅つて、束にして、持つて往つて了ふ。あとは苅り殘されの枯尾

花や枯葭の二三本、野茨の紅い實まじりに淋しく殘つて居る。覗いて見ると、小川の水は何處へ潜つたのか、窪い水道だけ乾いたまゝに殘される。

四

谷の向ふ正面は、雜木林、小杉林、畑などの入り亂れた北向きの傾斜である。此頃は其筋の取締も嚴重になつたが、彼が引越して來た當座は、まだ賭博が流行して、寒い夜向ふの雜木林に不思議の火を見ることもあつた。其火を見ぬ様になつたはよいが、眞正面に彼が七本松と名づけて愛でゝ居た赤松が、大分伐られたのは、惜しかつた。此等の傾斜を南に上りつめた丘の頂は、隣字の廻澤である。雜木林に家がホノ見え、杉の森に寺が隱れ、此程並木の櫟を伐つたので、畑の一部も街道も見える。彼が粕谷に住むだ六年の間に、目通りに木羽葺が一軒、麥藁葺が一軒出來た。最初はけば〳〵しい新屋根が氣障に見えたが、數年の風日は一を燻んだ紫に、一を

淡褐色にして、あたりの景色としつくり調和して見せた。此丘を甲州街道の瀧阪から分岐して青山へ行く青山街道が西から東へと這つて居る。青山に出るまでには大きな阪の二つもあるので、甲州街道の十分の一も往來は無いが、街道は街道である。肥車が通ふ。馬士が歌ふて荷馬車を牽いて通る。自轉車が鈴を鳴らして行く。稀に玉川行の自動車が通る。年に幾回か人力車が通る。道は面白い。座つて居て行路の人を眺むるのは、斷片の芝居を見る樣に面白い。時々は綠の油簞や振りの紅を遠目に見せて嫁入りが通る。附近に寺があるので、時々は哀しい南無阿彌陀ア佛の音頭念佛に導かれて葬式が通る。

街道は此丘を東に下りて、田圃を横ぎり、また丘に上つて、東へ都へと這つて行く。田圃をはさむ南北の丘が隣字の船橋で、幅四丁程の此田圃は長く世田ヶ谷の方へつゞいて居る。田圃の遙東に、いつも煙が幾筋か立つて居る。一番南が目黑の火藥製造所の煙で、次が澁谷の發電所、次ぎが大橋發電所の煙である。一度東京から

逗留に來た幼ない姪が、二三日すると懷家病に罹つて、何時も庭の端に出ては右の煙を眺めて居た。五月雨で田圃が白くなり、雲霧で遠望が煙にぼかさるゝ頃は、田圃の北から南へ出る岬と、南から北へと差出る鼻とが、宛ながら入江を圍む崎の如く末は海かと疑はれる。廻澤と云ひ、船橋と云ひ、地形から考へても、昔は此田圃は海か湖かであつたらうと思はれる。

五

谷から向ふの丘にかけて、麥と稻とが彼の爲に一年兩度綠になり黃になつてくれる。雜木林が、若葉と、青葉と、秋葉と、三度の榮を見せる。常見てはありとも見えぬ邊に、春來れば李や梅が白く、桃が紅く、夏來れば栗の花が黃白く、秋は其處此處に柿紅葉、白膠木紅葉、山紅葉が眼ざましく榮える。雪も好い。月も好い。眞暗い五月闇に草舍の紅い火を見るも好い。雨も好い。春陰も好い。秋晴も好い。降

る様な星の夜も好い。西の方甲州境の山から起つて、玉川を渡り、彼が住む村を過ぎて東京の方へ去る夕立を目迎へて見送るに好い。向ふの村の梢に先づ訪づれて、丘の櫟林、谷の尾花が末、さては己が庭の松と、次第に吹いて來る秋風を指點するに好い。翳つたり、照つたり、躁いだり、默つたり、雲と日と風の丘と谷とに戯るゝ鬼子つこを見るにも好い。白鯉の鱗を以て包むだり、蜘蛛の糸を以て織りなした縮羅の巾を引きはえたり、波なき海を縁どる夥しい砂濱を作つたり、地上の花を羞ぢ凋ます莊嚴偉麗の色彩を天空に輝かしたり、諒闇の黑布を瞬く間に全天に覆ふたり、摩天の白銅塔を見る間に築き上げては奈翁の雄圖よりも早く微塵に打崩したり、日々眼を新にする雲の幻術天象の變化を、出て見るも好い。

四邊が寂しいので、色々な物音が耳に響く。鄙びて長閑な鷄の聲。あらゆる鳥の音。子供の麥笛。うなりをうつて吹く二百十日の風。音なくして聲ある春の雨。音なく聲なき雪の緘默。單調な雷の樣で聞く耳に嬉しい籾摺りの響。凱旋の爆竹を聞

く樣な麥うちの響。秋祭りの笛太鼓。月夜の若い者の歌。子供の喜ぶ飴屋の笛。降るかと思ふと忽ち止む時雨のさゝやき。東京の午砲につゞいて横濱の午砲。濕つた日の電車汽車の響。稀に聞く工場の汽笛。夜は北から響く烏山の水車。隣家で井汲む音。向ふの街道を通る行軍兵士の靴音や砲車の響。小學校の唱歌。一丁はなれた隣家の柱時計が聞こゆる日もある。一番好いのは、春四月の末、隣の若葉した雜木林に朝日が射す時、ぽたり……ぽたりと若葉を辷る露の滴りを聽くのである。

夏秋の蟲の音の外に、一番嬉しいのは寺の鐘。眞言宗の安穩寺。其れはずッと西南へ寄つて、寺は見えぬが、鐘の音は聞こえる。東覺院、これも眞言宗、つい向ふの廻澤にあつて、寺は見えぬが、鐘の音は一番近い。尤も東にあるのが船橋の寶性寺、日蓮宗で、其草葺の屋根と大きな目じるしの橡の木は、小さく彼の縁から指さゝれる。

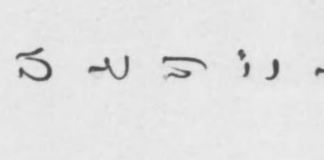
大木は地の榮である。彼の周圍に千年の古木は無い。甲州の山鏈を突破する二本

松、と豪農の杉の森の外、木らしい木は、北の方三丁ばかり畑を隔て、欅の杜の大欅が亭々と天を摩して聳えて居る。其若葉は此あたりで春の目じるし、其鳶色は秋も深い目じるしである。北の方は、此欅の中の欅と下枝を拂つた數本のはら〳〵松を點景にして、林から畑、畑から村と、遠く武藏野につゞいて居る。

六

家の門口は東にある。出ると直ぐ雜木林。彼の有ではないが、千金啻ならず彼に愛される。彼が家の背に、三角形をなす小さな櫟林と共に、春夏の際は若葉青葉の隧道を造る。青空から降る雨の樣に落葉する頃は、人の往來の足音が耳に立つ。蛇の巣でもあるが、春は香の好いツボスミレ、金蘭銀蘭、エゴ、ヨツド、メ、夏は白百合、撫子花、日あふぎ、秋は萩、女郎花、地楡、龍膽などが取々に咲く。ヨツド、メの實も紅の玉を綴る。楢茸、濕地茸も少しは立つ。秋はさながらの蟲籠で、松

蟲鈴蟲の好い音はないが、轡蟲などは喧しい程で、ともすれば家の中まで舞ひ込んでわめき立てる。今は無くなつたが、先年まで其林の南、墓地の東隣に家があつて、十五六の啞の兄と十二三になる盲の弟が、兄が提灯つけて見る眼を働かすれば、弟が聞く耳を立てゝ蟲の音を指し、不具二人寄つて一人前の蟲採をしたものだ。最早其家はつぶれ、弟は東京で一人前の按摩になり、兄は本家に引取られて居るが、蟲は秋毎に依然として鳴いて居る。家がさながら蟲の音に溺れる樣な宵がある。



地藏尊（注）しり目の

大正十二年九月一日の大震に倒れただけで無事だつた地藏尊が、大正十三年一月十五日の中震に二たび倒れて無慘や頭が落ちました。私共の身代りになつたやうなものです。身代り地藏と命名して、倒れたまま置くことにしました。

大正十三年　春彼岸の中日

地藏尊

地藏様が欲しいと云つてたら、甲州街道の植木なぞ扱ふ男が、荷車にのせて來て、庭の三本松の蔭に南向きに据ゑてくれた。八王子の在、高尾山下淺川附近の古い由緒ある農家の墓地から買つて來た六地藏の一體だと云ふ。眼を半眼に開いて、合掌してござる。近頃出來の頭の小さい輕薄な地藏に比すれば、頭が餘程大きく、曲眉豐頰ゆつたりとした柔和の相好、少しも近代生活の齷齪したさまがなく、大分ふるいものと見えて日苔が眞白について居る。惜しいことには、鼻の一部と唇の一部にホンの少しばかり缺けがあるが、情の中に何處か可笑味を添へて、却て趣をなすと云はゞ云はれる。臺石の横側に、○永四歳(丁亥)十月二日と彫つてある。最初一瞥して寛永と見たが、見直すと壽永に見えた。壽永では古い、平家沒落の頃だ。壽永だ、壽永にして措け、と壽永で納まつて居ると、ある時好古癖の甥が來て

壽永じやありません寶永ですと云ふた。云はれて見ると成程寶永だ。暦を繰ると、干支も合つて居る。そこで地藏樣の年齡も五百年あまり若くなつた。地藏樣は若くなつて嬉しいとも云はず、古さが減つていやとも云はず、ゆつたりした頰に愛嬌を湛へて、氣永に合掌してござる。寶永四年と云へば、富士が大暴れに暴れて、寶永山が一夜に富士の横腹を蹴破つて跳り出た年である。富士から八王子在の高尾までは、直徑にして十里足らず。荒れ山が噴き飛ばす灰を定めて地藏樣は被られたことであらう。如何でした、其時の御感想は？滅却心頭火亦凉と澄ましてお出でしたか？何と云ふても返事もせず、雨が降つても、日が照りつけても、晝でも、夜でも、默つて只合掌してござる。時々は馬鹿にした小鳥が白い糞をしかける。いたづらな蜘めが絲で頸をしめる。時々は家の主が汗臭い帽子を裏返しにかぶせて日に曝らす。地藏樣は忍辱の笑貌を少しも崩さず、堅固に合掌してござる。地藏樣を持て來た時植木屋が石の香爐を持て來て前に据ゑてくれた。朝々其れに清水を湛へて置く。近

在を駈け廻つて歸つたデカやピンが喘ぎ／＼來ては、焦れた舌で大きな音をさせて其水を飲む。雀や四十雀や頰白が時々來ては、あたりを覗つて香爐の水にぽちやぽちやや行水をやる。時々は家の主も瓜の種なぞ浸しく置く。散り松葉が沈み、蟻や螟蟲が溺死して居ることもある。尺に五寸の大海に鱗々の波が立つたり、青空や白雲が心長閑に浮いて居る日もある。地藏樣は何時も笑顏で、何時も默つて、何時も合掌してござる。

地藏樣の近くに、若い三本松と相對して、株立ちの若い山もみぢがある。春夏は綠、秋は黃と紅の蓋をさし翳す。家の主は此山もみぢの蔭に椅子テーブルを置いて、時々讀んだり書いたり、而して地藏樣を眺めたりする。彼の父方の叔母は、故鄕の眞宗の寺の住持の妻になつて、つひ去年まで生きて居たが、彼は儒敎實學の家に育つて、佛敎には遠かつた。唯乳母が居て、地獄、極樂、劍の山、三途の川、賽の河原や地藏樣の話を始終聞かしてくれた。四五歲の彼は身にしみて其話を聞いた。而

して子供心にやるせない悲哀を感じた。其様な話を聞いたあとで、つく〴〵眺めたうす闇い六疊の煤け障子にさして居る夕日の寂しい〳〵光を今も時々憶ひ出す。

賽の河原は哀しい而して眞實な俚傳である。此世は賽の河原である。大御親の膝下から此世にやられた一切衆生は、皆賽の河原の子供である。子供は皆小石を積むで日を過す。ピラミッドを積み、萬里の長城を築くのがエライでも無い。村の卯之吉が小麥蒔くのがツマラヌでも無い。一切の仕事は皆努力である。一切の經營は皆遊びである。而して我儕が折角骨折つて小石を積み上げて居ると、無慈悲の鬼めが來ては唯一棒に打崩す。ナポレオンが雄圖を築くと、ヲートルルーが打崩す。人間がタイタニックを造つて誇り貌に乘り出すと、氷山が來て微塵にする。勘作が小麥を蒔いて今年は豐年だと悅んで居ると、雹が降つて十分間に打散らす。蝶よ花よと育てた愛女が、墮落書生の餌になる。身代を注ぎ込むだ出來の好い息子が、大學卒業間際に肺病で死んで了ふ。蜀山を兀がした阿房宮が楚人の一炬に灰になる。人柱

を入れた堤防が一夜に崩れる。右を見、左を見ても、賽の河原は小石の山を鬼に崩されて泣いて居る子供ばかりだ。泣いて居るばかりなら猶可い。試驗に落第して、鐵道往生をする。財產を無くして、狂になる。世の中が思ふ樣にならぬでヤケを起し、太く短く世を渡らうとしてさま〴〵の不心得をする。鬼に窘められて鬼になり、他の小兒の積む石を崩してあるくも少くない。賽の河原は亂脈である。慈悲柔和に〳〵した地藏樣が出て來て慰めて下さらずば、賽の河原は、實に情無い住み憂い場所ではあるまいか。旅は道づれ世は情、我儕は情によつて生きることが出來る。地藏樣があつて、賽の河原は堪へられる。

庭に地藏樣を立たせて、おのれは日々鬼の生活をして居るでは、全く恥かしい事である。

水車問答

田川の流れをひいて、小さな水車が廻つて居る。水車のほとりに、樫の木が一本立つて居る。

白日も夢見る村の一人の遊び人が、ある日樫の木の下の草地に腰を下して、水車の軋々と廻るを見つゝ、聞きつゝ、例の睡るともなく寤むるともなく、此様な問答を聞いた。

軋と一聲長く曳張るかと思へば、水車が樫の木を呼びかけたのであつた。

「おい樫君、樫君。君は年が年中其處につくねんと立つて居るが、全體何をするのだい？斯忙しい世の中にさ、本當に氣が知れないせ。吾輩を見玉へ。吾輩は君、君も見て居やうが、そりやア忙しいんだせ。吾輩は君、地球と同じに日夜動いて居るんだせ。よしかね。吾輩は十五秒で一回轉する。ソレ一時間に二百四十回轉。一晝

夜に五千七百六十回轉、一年には勿驚約二百十萬〇三千八百四十回轉をやるんだ。なんと、眼が廻るだらう。君は吾輩が唯道樂に回轉して居ると思ふか。戯談じやない、全く骨が折れるせ。吾輩は決して無意味の活動をするんじやない。吾輩は人間の爲に穀も搗くのだ、粉も挽く。吾輩は昨年中に、エヽと、搗いた米がざつと五百何十石、餅米が百何十石、大麥が二千何百石、小麥が何百石、粟が……稗が……黍が——挽いた蕎麥粉が——饂飩粉……がまだ大分あるが、まあざつと一年の仕事が斯様なもんだ。如何だね、自贊じやないが、働きも此位やればまづ一人前はたつぶりだね。それにお隣に澄まして御出の御前は如何だ。如何に無能か性分か知らぬが、君の不活動も驚くじやないか。朝から晩までさ、年が年中其處にぬうと立ちぼかアんと立つて居て、而して一體お前は何をするんだい？吾輩は決してその自ら誇るじやないが、君の爲に此顏を赧うせざるを得ないね。おい、如何だ、樫君。言分があるなら、聞かうじやないか」

云ひ終つて、口角沫を飛ばす様に、水車は水沫を飛ばして、響も高々と軋々と一廻り廻つた。

其處に沈默の五六秒がつゞいた。かさ〳〵かさ〳〵頭上に細い葉ずれの音がするかと思ふと、其れは樫君が口を開いたのであつた。

「然つけ〳〵云はるゝと、俺は穴へでも入りたいが、まあ聞いてくれ。それや此處に斯うして毎日君の活動を見て居ると、羨ましくもなるし、默つて立つて居る俺は實以て濟まぬと恥かしくもなるが、此れが性分だ、造り主の仕置だから詮方は無い。それに君は俺が唯遊んで晝寢して暮らす樣に云ふたが、俺にも萬更仕事が無いでもない。聞いてくれ。俺の頭の上には青空がある。俺の頭は、日々夜々に此青空の方へ伸びて行く。俺の足の下には大地がある。俺の爪先は、日々夜々に地心へと向ふて入つて行く。俺の周圍には空氣と空間とがある。俺は此周圍に向ふて日々夜々に廣がつて行く。俺の仕事は此だ。此が俺の仕事だ。成長が仕事なのだ。俺の葉蔭で

夏の日に水車小屋の人達が涼むだり晝寢をしたり、俺の根が君を動かす水の流れの岸をば崩れぬ樣に固めたり、俺のドングリを小供が嬉々と拾ふたり、其樣な事は偶然の機緣で、仕事と云ふ俺の仕事ではない。俺は今一人だが、俺の友達も其處此處に居る。其一人は數年前に伐られて、今は荷車になつて甲州街道を東京の下肥のせて歩いて居る。他の友達は、下駄の齒になつて、泥濘の路石ころ路を歩いて居る。他の一人は鉋の臺になつて、大工の手脂に光つて居る。他の友達は薪になつて、とうに灰になつた。ドブ板になつたのもある。また木目が馬鹿に奇麗だと云つて、茶室の床柱なンかになつたのもある。根こぎにされて、都の邸の眼かくしにされたのもある。お百姓衆の鍬や鎌の柄になつたり、空氣タイヤの人力車の梶棒になつたり、さま〳〵の日に遭ふてさま〳〵の事をして居る。失禮ながら君の心棒も、俺の先代が身のなる果だと君は知らないか。俺は自分の運命を知らぬ。何れ如何にかなることであらう。唯其時が來るまでは、俺は默つて成長するばかりだ。君は折角眼ざま

しく活動し玉へ。俺は默つて成長する。」

云ひ終つて、一寸唾を吐いたと思ふと、其はドングリが一つ鼻先に落ちたのであつた。夢見男は吾に復へつた。而して唯いつもの通り廻る水車と、小春日に影も動かず眠つた様な樫の木とを見た。

農

我父は農夫なり　約翰傳第十五章一節

一

土の上に生れ、土の生むものを食ふて生き、而して死んで土になる。我儕は畢竟土の化物である。土の化物に一番適當した仕事は、土に働くことであらねばならぬ。あらゆる生活の方法の中、尤もよきものを擇み得た者は農である。

二

農は神の直參である。自然の懷に、自然の支配の下に、自然を贊けて働く彼等は、人間化した自然である。神を地主とすれば、彼等は神の小作人である。主宰を神と

すれば、彼等は神の直轄の下に住む天領の民である。綱島梁川君の所謂「神と共に働き、神と共に樂む」事を文義通り實行する職業があるならば、其れは農であらねばならぬ。

三

農は人生生活のアルファにしてオメガである。

ナイル、ユウフラテの畔に、木片で土を掘つて、野生の穀を蒔いて居た原始的農の代から、精巧な器械を用ゐて大仕掛にやる米國式大農の今日まで、世界は眼まぐろしい變遷を閲した。然しながら土は依然として土である。歴史は青人草の上を唯風の如く吹き過ぎた。農の命は土の命である。諸君は土を亡ぼすことは出來ない。幾多のナポレオン、維廉、シシルローズをして勝手に其帝國を經營せしめよ。幾多のロスチヤイルド、モルガンをして勝手に其弗法を掻き集めしめよ。幾多のツエッペ

リン、ホルランドをして勝手に鳥の眞似魚の眞似をせしめよ。幾多のベルグソン、メチニコフ、ヘツケルをして盛んに論議せしめ、幾多のショウ、ハウプトマンをして隨意に笑つたり泣いたりせしめ、幾多のガウガン、ロダンをして盛に塗り且刻ましめよ。大多數の農は依然として、日出而作、日入而息、掘井而飲、耕田而食ふであらう。倫敦、巴里、伯林、紐育、東京は狐兎の窟となり、世は終に近づく時も、サハラの沃野にふり上ぐる農の鍬は、夕日に晃めくであらう。

四

大なる哉土の德や。如何なる不淨も容れざるなく、如何なる罪人も養はざるは無い。如何なる低能の人間も、爾の懷に生活を見出すことが出來る。如何なる數奇の將軍も、爾の懷に不平を葬ることが出來る。如何なる不遇の詩人も、爾の懷に憂を遣ることが出來る。あらゆる放浪を爲盡して行き處なき蕩兒も、爾の懷に歸つて安

息を見出すことが出來る。

あはれなる工場の人よ。可哀想なる地底の坑夫よ。氣の毒なる店頭の人、デスクの人よ。笑止なる臺閣の人よ。羨む可き爾農夫よ。爾の家は假令豕小屋に似たり共、爾の働く舞臺は青天の下、大地の上である。爾の手足は松の膚の如く荒るゝ共、爾の筋骨は鋼鐵を欺く。烈日の下に瀧なす汗を流す共、野の風はヨリ涼しく爾を吹く。爾は麥飯を食ふも、夜毎に快眠を與へられる。急がず休まず一鍬一鍬土を耕し、遽てず恚らず一日一日其苗の長ずるを待つ。假令思ひがけない風、旱、水、雹、霜の天災を時に受くることがあつても、「エホバ與へ、エホバ取り玉ふ」のである。土が殘つて居る。來年がある。昨日富豪となり明日乞丐となる市井の投機兒をして勝手に飜筋斗をきらしめよ。彼愚なる官人をして學者をして隨意に威張らしめよ。爾の頭は低くとも、爾の足は土について居る、爾の腰は丈夫である。

五

農程呑氣らしく、のろまに見える者は無い。彼の顏は澤山の空間と時間を有つて居る。彼の多くは帳簿を有たぬ。年末になつて、殘つた足らぬと云ふのである。彼の記憶は長く、與へ主が忘れて了ふ頃になつてのこ〳〵禮に來る。利を分秒に爭ひ、其日々々に損得の勘定を爲し、右の報を左に取る現金な都人から見れば、馬鹿らしくてたまらぬ。辰爺さんの曰く、「悧巧なやつは皆東京へ出ちやつて、馬鹿ばかり田舍に殘つて居るでさア」と。遮莫農をオロカと云ふは、天網を疎と謂ひ、月日をのろいと云ひ、大地を動かぬと謂ふ意味である。一秒時の十萬分の一で一閃する電光を痛快と喜ぶは好い。然し開闢以來まだ光線の我儕に屆かぬ星の存在を否むは僻事である。所謂「神の愚は人よりも敏し」と云ふ語あるを忘れてはならぬ。

六

農と女は共通性を有つて居る。彼美的百姓は曾て都の美しい娘達の學問する學校で、「女は土である」と演說して、娘達の大抗議的笑を博した事がある。然し乾を父と稱し、坤を母と稱す、Mother Earth なぞ云つて、一切を包容し、忍受し、生育する土と女性の間には、深い意味の連絡がある。土と女の連絡は、土に働く土の精なる農と女の連絡である。

農の弱味は女の弱味である。女の强味は農の强味である。蹂躙される樣で實は搭載し、常に負ける樣で永久に勝つて行く大なる土の性を彼等は共に具へて居る。

七

農程臆病なものは無い。農程無抵抗主義なものは無い。權力の前には彼等は頭が

上がらない。「田家衣食無厚薄、不見縣門身即樂」で、官衙に彼等はびく〳〵ものである。然し彼等の權力を敬するは、敬して實は遠ざかるのである。稅もこぼしながら出す。徵兵にも、泣きながら出す。御上の沙汰としなれば、大抵の事は泣きの涙でも默つて通す。然し彼等が斯くするは、必しも御上に隨喜の結果ではない。彼等が政府の命令に從ふのは、彼等が强盜に金を出す樣なものだ。此邊の豪農の家では、以前よく强盜に入られるので、二十圓なり三十圓なり强盜に奉納の小金を常に手近に出して置いたものだ。無益の爭して怪我するよりも、と詮らめて然するのである。農は從順である。土の從順なるが如く從順である。土は無感覺の如く見える。土の如く鈍如した農の顏を見れば、限りなく蹂躙してよいかの如く誰も思ふであらう。然しながら其無感覺の如く見える土にも、恐ろしい地辷りあり、恐ろしい地震があり、深い心の底には燃ゆる火もあり、沸く水もあり、清しい命の水もあり、燃せば力の黑金剛石の石炭もあり、無價の寶石も潛んで居ることを忘れてはならぬ。竹槍

席旗は、昔から土に侔しい無抵抗主義の農が最後の手段であつた。露西亞の強味は、農の強味である。莫斯科まで攻め入られて、初めて彼等の勇氣は出て來る。農の怒は最後まで耐へられる。一たび發すれば、是れ地盤の震動である。何ものか震動する大地の上に立てやうぞ？

八

農家に附きものは不潔である。だらしのないが、農家の病である。然し缺點は常に裏から見た長所である。土と水とが一切の汚物を受け容れなかつたら、世界の汚物は何處へ往くであらうか。土が潔癖になつたら、不潔は如何なることであらうか。土の土たるは、不潔を排斥して自己の潔を保つでなく、不潔を包容し淨化して生命の溫床たるにある。「吾父は農夫也」と耶蘇の道破した如く、神は正しく一の大農夫である。神は一切を好と見る。「吾の造りたるものを不潔とするなかれ」是れ大農夫

たる神の言葉である。自然の眼に不潔なし。而して農は尤も正しい自然主義に立つものである。

九

土なるかな。農なるかな。地に人の子の住まん限り、農は人の子にとつて最も自然且つ尊貴な生活の方法で、且其救であらねばならぬ。

蛇

一

蟲類で、彼の嫌ひなものは、蛇、蟷螂、蠑螈、蛞蝓、尺蠖。

蠑螈の赤腹を見ると、嘔吐が出る。蟷螂はあの三角の小さな頭、淡綠色の大きな眼球に蚊の嘴程の纖く鋭い而してぢいと人を見詰むる瞳を點じた凄い眼、黑く鋭い口嘴、Vice の樣な其兩手、剖いて見れば黑い蟲の樣に蠢く腸を滿たしたふくれ腹、身を逆さにして草木の葉がくれに待伏し、うつかり飛んで來る蟬の胸先に嚙みついてばた〳〵苦しがらせたり、小さな青蛙の咽に爪うちかけてひい〳〵云はしたり、要するに彼はこれ蟲界の Iago 惡魔の慘忍を體現した樣なものである。引捉へてやらうとすれば、彼は小さな飛行機の如く、羽をひろげてばッぱた〳〵と飛むで往つ

て了ふ。憎いやつである。それから、家を負ふ蝸牛の可愛氣はなくて、ぐちやりと唯意氣地なさを代表した樣で、それで青菜甘藍を何時の間にか意地汚なく喰ひ盡す蛞蝓と、枯枝の眞似して居て、うつかり觸れば生きてますと云ひ貌にびちりと身を捩り、あつと云つて刎ね飛ばせば、蟲のくせに猪口才な、頭と尾とで寸法とつて信玄流に進む尺蠖とは、氣もちの惡い一對である。此等は何れも嬉しくない連中だが、然しまだまだ蛇には敵はぬ。

二

蛇嫌ひは、我等人間の多數に、祖先から血で傳はつて居る。話で聞き、畫で見、幼ない時から大蛇は彼の恐怖の一であつた。子供の時から彼はよく蛇の夢を見た。今も心身にいやな事があれば、直ぐ蛇を夢に見る。現に彼が蛇を見たのは五六歲の頃であつた。腫物の湯治に、鄕里熊本から五里ばかり有明の海邊の小天の溫泉に連

れられて往つた時、宿が天井の無い家で、寢ながら上を見て居ると、眞黑に煤けた屋根裏の竹を縫ふて何やら動いて居た。所謂青大將であつたが、是れ目に見ていやなものと蛇を思ふ最初であつた。

彼の兄は彼に劣らぬ蛇嫌ひで、ある時家の下の小川で魚を抄ふとて蛇を抄ひ上げ、きやつと叫んで笊を抛り出し、眞蒼になつて逃げ歸つたことがある。七八歳の頃、兄弟連れ立つての學校歸りに、川泳ぎして居た惡太郎が其時は一丈もあらうと思ふた程の大きな青大將の死んだのを路の中央に横たへて恐れて逡巡する彼を川の中から手を拍つて笑つた。兄が腹を立て、彼の手を引きずる樣にして越えやうとする。大奮發して二足三足、蛇の一間も手前まで來ると、死んで居る動かぬとは知つても、長々と引きずつた其體、白くかへした其段だらの腹を見ると、彼の勇氣は頭の頂邊からすうとぬけてしまふて如何しても足が進まぬ。已むを得ず土堤の上を通らうとすれば、惡太郎が川から上つて來て、また蛇を土堤の上に引きずつて來る。結局如

何して通つたか覺えぬが、生來斯樣な苦しい思をさせられたことはなかつた。彼の從弟は少しも蛇を恐れず、杉籬に絡むで居るやつを尾をとつて引きずり出し、環を廻す樣に大地に打つけて、樂々と殺すのが、彼には人間以上の勇氣神わざの樣に凄じく思はれた。十六歳の夏、兄と阿蘇の溫泉に行く時、近道をして三里餘も畑の畔の草徑を通つた。吾儘な兄は蛇拂として彼に先導の役を命じた。其頃は蛇より兄が尙恐かつたので、恐づ〳〵五六歩先に立つた。出るわ〳〵、二足行つてはかさ〳〵かさ、五歩往つてはくわさ〳〵〳〵、烏蛇、山かゞし、地もぐり、あらゆる蛇が彼の足許から右左に逃げて行く。まるで蛇を踏分けて行くやうなものだ。今にも踏んで卷きつかれるのだと觀念し、絶望の勇氣を振ふて死物狂に邁進したが、到頭直接接觸の經驗だけは免れた。阿蘇の溫泉に往つたら、彼等が京都の同志社で識つて居た其處の息子が、先日川端の湯樋を見に往つて蝮に嚙まれたと云つて、跛をひいて居た。彼の鄕里では蝮をヒラクチと云ふ。ある年の秋、西山に遊びに往つて、唯有

る崖を攀ぢて居ると、「ヒラクチが居つたぞウ」と上から誰やら警戒を叫んだ。其時の魂も消入る様な心細さを今も時々憶ひ出す。

三

村住居をする様になつて、隣は雑木林だし、墓地は近し、是非なく蛇とは近付になつた。蝮はまだ一度も見かけぬが、青大將、山かゞし、地もぐりの類は澤山居る。最初は生類御憐みで、蟲も殺さぬことにして居たが、此頃では其時の氣分次第、殺しもすれば見逗しもする。殺しても盡きはせぬが、打ちやつて置くと殖えて仕様がないのである。書院の前に大きな百日紅がある。もと墓地にあつたもので、百年以上の老木だ。村の人々が五圓で植木屋に賣つたのを、すでに家の下まで引出した時、彼が無理に讓つてもらつたのである。中は悉皆空洞になつて、枝の或ものは連理になつて居る。其れを植ゑた時、墓地の東隣に住むで居た啞の子が、其幹を指して、

何かによろ〳〵と上つて行く狀をして見せたが、墓地にあつた時から此百日紅は蛇の棲家であつたのだ。彼の家に移つて後も、梅雨前になると蛇が來て空洞の孔から頭を出したり、幹に絡むだり、枝の上にトグロをまいて日なたぼこりしたりする。三疋も四疋も出て居ることがある。百日紅の枝其ものが滑つこく蛇の膚に似通ふて居るので、蛇も居心地がよいのであらう。其下を通ると、あまり好い氣もちはせぬ。時々は百日紅から家の中へ來ることもある。ある時書院の雨戸をしめて居た妻がきやつと叫むだ。南の戸袋に蛇が居たのである。雀が巣くふ頃で、雀の臭を追ふて戸袋へ來て居たのであらう。其翌晩、妻が雨戸をしめに行くと、今度は北の戸袋に居た。妻がまたけたゝましく呼むだ。往つて繰り殘しの雨戸で窃と當つて見ると、確に軟らかなものゝ手答がする。釣糸に響く魚の手答は好いが、蛇の手應へは下さらぬ。雨戸をしめれば蛇の逃所がなし、しめねばならず、ランプを呼ぶやら、青竹を吟味するやら、小半時かゝつて雨戸をしめ、隅に小さくなつて居るのを手早くたゝ

き殺した。其れが雌でゞもあつたか、翌日他の一疋がのろ〳〵と其侶を探がしに來た。一つ撲つて、ふりかへる處をつゞけざまに五六つたゝいて打殺した。殺してしまふて、つまらぬ殺生をしたと思ふた。

彼が家のはなれの物置兼客間の天井には、ぬけ殼から測つて六尺以上の青大將が居る。其家が隣村にあつた頃からの蛇で、家を引移すと何時の間にか大將も引越して、吾家貌に住むで居る。所謂ヌシだ。隣村の千里眼に見てもらつたら、舊家主の先代のおかみの後身だと云ふた。夥しい糞尿をしたり、夜は天井をぞろ〳〵重い物曳きずる樣な音をさせてあるく。梅雨の頃、ある日物置に居ると、バリバリと音がした。見ると、其處に卵の殼を澤山入れた目籠に、彼ぬしでは無いが可なり大きな他の青大將が來て、盛に卵の殼を食ふて居るのである。見て居る内に、長持の背からまた一疋のろ〳〵這ひ出して來て、先のと絡み合ひながら、これもバリ〳〵卵の殼を喰ひはじめた。青黑い滑々したあの長細い體が、生き繩の樣に眼の前に伸びた

り縮むだりするのは、見て居て氣もちの好いものではない。不圖見ると、呀此處にも、梁の上に頭は見えぬが、大きなものが胴から下波うつて居る。人間が居ないので、蛇君等が處得貌に我家と住みなして居るのである。天井裏まで上つたら、右の三疋に止まらなかつたであらう。彼は其日一日頭が痛かつた。

ある時栗買ひに隣村の農家に往つた。上塗をせぬ土藏の腰部に幾個の孔があつて、孔から一々繩が下つて居る。其繩の一つが動く樣なので、眼をとめて見ると、其繩は蛇だつた。見て居る内にずうと引込んだが、またのろ〳〵と頭を出して、丁度他の繩の下つて居ると同じ程にだらりと下がつた。何をするのか、何の爲に繩の眞似をするのか。鏡花君の繩張に入る可き蛇の擧動と、彼は薄氣味惡くなつた。

勇將の下に弱卒なし。彼が蛇を恐れる如く、彼が郎黨の犬のデカも獰猛な武者振をしながら頗る蛇を恐れる。蛇を見ると無闇に吠えるが、中々傍へは寄らぬ。主人が勇氣を出して蛇を殺すと、デカは死骸の周圍をぐる〳〵廻つて、一足寄つてはワ

ンと吠え、二足寄つては遽てゝ飛びのいてワンと吠え、ワンと吠え、ワンと吠え、廻り廻つて、中々傍へは寄らぬ。ある時、麥畑に三尺ばかりの山かゞしが居た。山かゞしは、やゝ精悍なやつである。主人が聲援したので、デカは思切つてワンと嚙みにかゝつたら、口か舌かを螫されたと見え、一聲悲鳴をあげて飛びのき、それから限なく口から白泡を吐いて、一時は如何なる事かと危ぶんだ。此樣な記憶があるので、デカは蛇を恐るゝのであらう。多くの猫は蛇を捕る。彼が家のトラはよく寢鳥を捕つてはむしや〳〵喰ふが、蛇をまだ一度もとらぬ。ある時、トラが何ものかと相對し貌に、芝生に座つて居るので、覗いて見たら、トグロを卷いた地もぐりが頭をちゞめて寄らば擊たんと眼を怒らして居る。トラが居ずまゐを直すたびに、蛇は其頭をトラの方へ向け直す。トラは相關せざるものゝ樣に、キチンと前足を揃へて、何か他の事を案じ顏である。彼が打殺す可く竿をとりに往つた間に、トラも蛇も物別れになつて何處かへ往つてしまふた。

四

斯く蛇に近くなつても、まだ嫌惡の情は除れぬ。百花の園にも、一疋の蛇が居れば、最早園其ものが嫌になる。ある時、書齋の緣の柱の下に、一疋の蛇がによろによろ頭を擡げて、上らうか、と思ふ樣子をして居た。遽てゝ蛇打棒を取りに往つた間に、蛇が見えなくなつた。びく〳〵もので、戸袋の中や、室內のデスクの下、ソファの下、はては額の裏まで探がした。居ない。居ないが、何處かに隱れて居る樣で、安心が出來ぬ。枕を高くして晝寢も出來ぬ。其日一日は終に不安の中に暮らした。蛇を見ると、彼が生活の愉快がすうと泡の樣に消える。彼は何より菓物が好きで、南洋に住みたいが、唯蛇が多いので其氣にもなれぬ。ボア、バイゾンの長大なものでなく、食匙蛇、響尾蛇、蝮蛇の毒あるでもなく、小さい、無害な、臆病な、人を見れば直ぐ逃げる、二つ三つ打てば直ぐ死ぬ、眼の敵に殺さるゝ云はば氣の毒

な蛇までも、何故斯様に彼は恐れ嫌がるのであらう？田舎の人達は、子供に到るまで、あまり蛇を恐れぬ。卵でも呑みに來たり、餘程わるさをしなければ滅多に殺さぬ。自然に生活する自然の人なる農の仕方は、おのづから深い智慧に適ふ事が多い。

奥州の方では、昔蛇が居ない爲に、夥しい鼠に山林の木芽を食はれ、わざ〳〵蛇を取寄せて山野に放つたこともあるさうだ。食ふものが無くて、蛇を食ふ處さへある。好きとあつては、ポッケットに入れてあるく人さへある。

惡戯に蛇を投げかけやうとした者を已に打果すとて刀の柄に手をかけた程蛇嫌ひの士が、後法師になつて、蛇の巣と云はるゝ竹生島に庵を結び、蛇の中で修行した話は、西鶴の物語で讀むだ。東京の某耶蘇教會で賢婦人の名があつた某女史は、眼が惡い時落ちた襷と間違へて何より嫌ひな蛇を握り、其れから信仰に進んだと傳へられる。糞尿にも道あり、蛇も菩提に導く善智識であらねばならぬ。

「世の中に這入かねてや蛇の穴」とは古人の句。醜い姿忌み嫌はるゝ悲しさに、大びらに明るい世には出られず、常に人目を避けて陰地にのたくり、弱きを窘めて冷たく、執念深く、笑ふこともなく世を過す蛇を思へば、彼は蛇を嫌ふ權理がないばかりではなく、蛇は恐らく蟲に化つて居る彼自身ではあるまいか。己が醜くさを見せらるゝ爲に、彼は蛇を忌み嫌ひ而して恐るゝのであるまいか。

生命は共通である。生存は相殺である。自然は偏倚を容さぬ。愛憎は我等が宇宙に縋る二本の手である。好惡は人生を歩む左右の脚である。

好きなものが毒になり、嫌ひなものが藥になる。好きなものを食ふて、嫌ひなものに食はれる。宇宙の生命は斯くして有たるゝのである。

好きなものを好くは本能である。嫌ひなものを好くに我儕の理想がある。

「天の父の全きが如く全くす可し」

本能から出發して、我等は個々理想に向はねばならぬ。

露の祈

今朝庭を歩いて居ると、眼が一隅に走る瞬間、はッとして彼は立とまつた。枯萩の枝にものが光る。玉だ！誰が何時撒いたのか、此枝にも、彼枝にも、紅玉、黄玉、紫玉、緑玉、碧玉の數々、きらり、きらりと光つて居る。何と云ふ美しい玉であらう！嗟嘆してやゝしばし見とれた。近寄つて一の枝に觸ると、ほろりと消えた。何だ、露か。さうだ、やはりいつもの露であつた。露、露、いつもの露を玉にした魔術師は何處に居る？彼はふりかへつて、東の空に杲々と輝く朝日を見た。

あゝ、朝日！

爾の無限大を以てして一滴の露に宿るを厭はぬ爾朝日！

須臾の命を小枝に托するはかない水の一雫、其露を玉と光らす爾大日輪！

「爾の子、爾の榮を現はさん爲に、爾の子の榮を顯はし玉へ」

の祈は彼の口を衝いて出た。

天つ日の光に玉とかがやかば
　　などか惜まん露の此の身を

草とり

一

六、七、八、九の月は、農家は草と合戰である。自然主義の天は一切のものを生じ、一切の強いものを育てる。うつちやつて置けば、比較的脆弱な五穀蔬菜は、野草に杜がれてしまふ。二宮尊德の所謂「天道すべての物を生ず、裁制補導は人間の道」で、こゝに人間と草の戰鬪が開かるゝのである。

老人、子供、大抵の病人はもとより、手のあるものは火斗でも使ひたい程、畑の草田の草は猛烈に攻め寄する。飯焚く時間を惜んで餅を食ひ、茶もおち〳〵は飲むで居られぬ程、自然は休戰の息つく間も與へて呉れぬ。

「草に攻められます」とよく農家の人達は云ふ。人間が草を退治せねばならぬ程、

草が人間を攻めるのである。

唯二反そこらの畑を有つ美的百姓でも、夏秋は烈しく草に攻められる。起きぬけに顏も洗はず露蹴散らして草をとる。日の傾いた夕蔭にとる。取りきれないで、日中にもとる。やつと奇麗になつたかと思ふと、最早一方では生えて居る。草と蟲さへ無かつたら、田園の夏は本當に好いのだが、と愚痴をこぼさぬことは無い。全體草なンか餘計なものが何になるのか。何故人間が除草器械にならねばならぬか。除草は愚だ、うつちやつて草と作物の競爭さして、全滅とも行くまいから殘つただけを此方に貰へば濟む。といふても、實際眼前に草の跋扈を見れば、除らずには居られぬ。隣の畑が奇麗なのを見れば、此方の畑を草にして草の種を隣に飛ばしても濟まぬ。近所の迷惑も思はねばならぬ。

そこでまた勇氣を振起して草をとる。一本また一本。一本除れば一本減るのだ。草の種は限なくとも、とつただけは草が減るのだ。手には畑の草をとりつゝ、心に

心田の草をとる。心が畑か、畑が心か、兎角に草が生え易い。油斷をすれば畑は草だらけである。吾儕の心も草だらけである。四圍の社會も草だらけである。吾儕は世界の草の種を除り盡すことは出來ぬ。除り盡すことは、また我儕人間の幸福でないかも知れぬ。然しうつちやつて置けば、我儕は草に埋もれて了ふ。そこで草を除る。己が爲に草を除るのだ。生命の爲に草をとるのだ。敵國外患なければ國常に亡ぶで、草がなければ農家は墮落して了ふ。

「爾我言に背いて禁菓を食ひたれば、土は爾の爲に咀はる。土は爾の爲に荊棘と薊を生ずべし。爾は額に汗して苦しみて爾のパンを食はん」

斯く舊約聖書は草を人間の罰と見た。實は此の罰は人の子に對する深い親心の祝福である。

二

美的百姓の彼は兎角見るに美しくする爲に草をとる。除るとなれば氣にして一本殘さずとる。農家は更に賢いのである。草を絶やすと地力を盡すと云ふ。草をとつて生のまゝ土に埋め、或は烈日に乾燥させ、燒いて灰にし、積んで腐らし、いづれにしても土の肥料にしてしまふ。馴付けた敵は、味方である。「年々や櫻を肥す花の塵」美しい花が落ちて親木の肥料になるのみならず、邪魔の醜草がまた死んで土の肥料になる。清水却て魚棲まず、草一本もない土は見るに氣もちがよくとも、或は生命なき瘠土になるかも知れぬ。本能は滅す可からず、不良青年は殺さずして導く可きであることを忘れてはならぬ。誰か其懷に多少の草の種を有つて居らぬ者があらうぞ？

畑の草にも色々ある。つまんでぬけばすぽつとぬけて、しかも一種の芳しい香を放つ草もある。此邊で鹹草と云ふ、丈矮く莖紅ぶとりして、頑固らしく蹯つて居ても、根は案外淺くして、一擧手に亡ぼさるゝ草もある。葉も無く花も無く、地下一

尺の闇を一丈も二丈も這ひまはり、人知れず穀菜に仇なす無名草もある。厄介なのは、地縛り。單瓣の黄なる小菊の様に可憐な花をしながら、蔓延又蔓延、糸の様な蔓は引けば直ぐ切れて根を殘し、一寸の根でも殘れば十日とたゝずまた一面の草になる。土深く鍬を入れて掘り返へし、丁寧に根を拾ふ外に滅す道は無い。我儕は世を渡りて往々此種の草に出會ふ。

草を苅るには、朝露の晞かぬ間。露にそぼぬれた寢ざめの草は、鎌の刄を迎へてさく〳〵切れて行く。一擧に草を征伐するには、夏の土用の中、不精鎌と俗に云ふ柄の長い大きなカマボコ形の鎌で、片端からがり〳〵搔いて行く。梅雨中には、搔く片端からついてしまふ。土用中なら、一時間で枯れて了ふ。

夏草は生長猛烈でも、氣をつけるから案外制し易い。恐ろしいのは秋草である。行末短い秋草は、種がこぼれて、生えて、小さなまゝで花が咲いて、直ぐ實になる。其遽しさ、草から見れば涙である。然し油斷してうつかり種をこぼされたら、事で

ある。一度落した草の種は中々急に除り切れぬ。田舍を歩いて、奇麗に鍬目の入つた作物のよく出來た畑の中に、草が茂つて作物の幅がきかぬ畑を見ることがある。昨年の秋、病災不幸などでつい手が廻らずに秋草をとらなかつた家の畑である。

草を除らうよ。草を除らうよ。

不　淨

上

此邊の若者は皆東京行をする。此邊の「東京行」は、直ちに「不淨取り」を意味する。

東京を中心として、水路は別、陸路五里四方は東京の「掃除」を取る。荷車を引いて、日歸りが出來る距離である。荷馬車もあるが、九分九厘までは手車である。ずッと昔は、細長い肥桶で、馬に四桶附け、人も二桶擔つて持つて來たが、後、輪の大きい大八車で引く樣になり、今は簡易な荷車になつた。彼の村では方角上大抵四谷、赤坂が重で、稀には麴町まで出かけるのもある。弱い者でも桶の四つは引く。少し力がある若者は、六つ、甚しいのは七つも八つも挽く。一桶の重量十六貫とす

れば、六桶も挽けば百貫からの重荷だ。あまり重荷を挽くので、若者の內には眼を惡くする者もある。

股引草鞋、夏は經木眞田の輕い帽、冬は釜底の帽を阿彌陀にかぶり、焦茶毛糸の襟卷、中には樺色の麁い毛糸の手袋をして、雨天には簑笠姿で、車の心棒に油を入れた竹筒をぶらさげ、空の肥桶の上に、馬鈴薯、甘薯の二籠三籠、焚付疎朶の五把六束、季節によつては菖蒲や南天小菊の束なぞ上積にした車が、甲州街道を朝々幾百臺となく東京へ向ふて行く。午後になると歸つて來る。兩腕に力を入れ、前俛みになつて、揉みあげに汗の珠をたらして、重さうに挽いて歸つて來る。上荷には、屋根の修繕に入用のはりがねの二卷三卷、棕櫚繩の十束二十束、風呂敷かけた遠路籠の中には、子供へみやげの煎餅の袋も入つて居やう。かみさんの賴むだメリンスの前掛も入つて居やう。或は娘の晴着の銘仙も入つて居やう。此邊の女は大抵留守ばかりして居て、唯三里の東京を一生見ずに死ぬ者もある。娘の婚禮着すら男親が

買ふことになつて居る。「阿爺、儂ア此縞ア嫌だ」と、毎々阿娘の苦情が出る。其等の車が陸續として歸つて來る。東京場末の飯屋に寄る者もあるが、多くは車を街道に片寄せて置いて、木蔭で麥や稗の辨當をつかふ。夏の日ざかりには、飯を食ふたあとで、杉の木蔭に鼾々焉と寢て居る。荷が重いか、路が惡い時は、弟や妹が中途まで出迎へて、後押して來る。里道にきれ込むと、砂利も入つて居らぬ路はひどくぬかるが、路が惡い惡いとこぼしつゝ、格別路をよくしやうともせぬ。其樣な暇も金も無いのである。

甲州街道の新宿出入口は、町幅が狹い上に、馬、車の往來が多いので、時々肥料車が怪我をする。歸りでも晩いと、氣が氣でなく、無事な顏見るまでは心配でならぬと、村の婆さんが云ふた。水の上を憂ふる漁師の妻ばかりではない。平和な農村にも斯樣な行路難がある。

東京界隈の農家が申合せて一切下肥を汲まぬとなつたら、東京は如何樣に困るだ

らう。彼が東京住居をして居た時、ある日隣家の御隱居婆さんが、「一ばいになつてこぼるゝ樣になつてるものを、せつせと來てくれンぢや困るじやないか」と癇癪聲で百姓を叱る聲を聞いた。其は權高な御後室樣の怒聲よりも、焦れた子供の賴無げな恨めしげな苦情聲であつた。大君の御膝下、日本の中樞と威張る東京人も、子供の樣に尿屎のあと始末をしてもらふので、田舍の保姆の來やうが遲いと、斯樣に困つてぢれ給ふのである。叱られた百姓は默つて其糞尿を掃除して、それを肥料に穀物蔬菜を作つては、また東京に持つて往つて東京人を養ふ。不淨を以て淨を作り、廢物を以て生命を造る。「吾父は農夫なり」と神の愛子は云つたが、實際神は一大農夫で、百姓は其型を無意識にやつて居るのである。

衆議院議員の選擧權位は有つて居る家の息子や主人が掃除に行く。東京を笠に被て、二百萬の御威光で叱りつくる長屋のかみさんなど、掃除人の家に往つたら、土藏の二戸前もあつて、喫驚する樣な立派な住居に魂消ることであらう。斯く云ふ彼

も、東京住居中は、晝飯時に掃除に來たと云つては叱り、門前に肥桶を並べたと云つては怒鳴つたりしたものだ。園藝を好むだので、糞尿を格別忌むでも賤むでもなかつたが、不淨取りの人達を糞尿をとつてもらふ以外沒交渉の輩として居た。來て其人達の中に住めば、此處も嬉し哀しい人生である。息子を兵役にとられ、五十越した與右衞門さんが、甲州街道を汗水滴らして肥車を挽くのを見ると、假令其れが名高い吾儘者の與右衞門さんでも、心から氣の毒にならずには居られぬ。而して此頃では、むッといきれの立つ堆肥の小山や、肥溜一ぱいに堆く膨れ上る青黑い下肥を見ると、彼は其處に千町田の垂穗を眺むる心地して、快然と豐かな氣もちになるのである。

下

「新宿のねェよ、女郎屋でさァ、女郎屋に掃除を取りに行く時ねェよ、饂飩粉なんか持つてつてやると、そりや喜ぶよ」

辰爺さんは斯う云ふた。

同じ糞でも、病院の糞だの、女郎屋の糞だのと云ふと、餘計に汚ない樣に思ふ。

不潔を扱ふと、不潔が次第に不潔でなくなる。葛西の肥料屋では、肥桶にぐつと腕を突込み、べたりと糞のつくとつかぬで下肥の濃薄從つて良否を驗するさうだ。此邊でも、基肥を置く時は、下肥を堆肥に交ぜてぐちゃ〳〵したやつを盛つた肥桶を頸からつるし、後ざまに畝を歩みつゝ、一足毎に片手に掴み出してはやり、掴み出してはやりする。或は更に稀薄にしたのを、剝椀で抄ふてはざぶりざぶり水田にくれる。時々は眼鼻に糞汁がかゝる。

「あつ、糞が眼ン中へ入つちやつた」と若いのが云ふ。

「其れが本當の眼糞だァ」爺は平然たるものだ。

平然たる爺が、ある時三四歳の男の子を連れて遊びに來た。誰のかと云へば、お

春のだと云ふ。お春さんは爺さんの娘分になつて居る若い女だ。

「お春が拾つて來たんでさア」と爺さんがにや〳〵笑ひながら曰ふた。

「拾つて來た？何處で？」

野暮先生正に何處かで捨子を拾つて來たのだと思ふた。爺は唯にや〳〵笑つて居た。其は私生兒であつた。お春さんの私生兒であつた。

お春さん自身が東京藝者の私生兒であつた。里子からずる〳〵に爺さんの娘分になり、近所に奉公に出て居る內に、丁度母の藝者が彼女を生むだ十六の年に、彼女も私生兒を生むだ。歷史は繰り返へす。細胞の記憶も執拗なものである。十六の母は其私生兒を負つて、平氣に人だかりの場所へ出た。無頓着な田舍でも、「ありや如何したンだんべ？」と眼を圓くして笑つた。然し女に廢物は無い。お春さんは他の東京から貰はれて來た里子の果の男と出來合ふて、其私生兒を殘して嫁に往つた。而して二人は今幸福に暮らして居る。

ある爺さんのおかみは、昔若かつた時一度亭主を捨て、情夫と逃げた。然し歸つて來ると、爺さんは四の五の云はずに依然かみさんの座に坐らした。太公望の如く意地惡ではなかつた。夫婦に娘が出來て、年頃になつた。其娘が出入の若い大工と物置の中に潛む日があつた。昔男と道行の經驗があるおかみは頻と之を氣にして、裏口から娘の名を呼び〳〵した。爺さんの曰く、うつちやつておけやい、若ェ者だもの、些ア蟲もつくべいや。此は此爺さんのズボラ哲學である。差別派からは感心は出來ぬが、中に大なる信仰と眞理がある。

甲吉が嬶をもらふ。其は隣村の女で、奉公して居る內主人の子を生むだのだと云ふ。乙太郎の女が嫁に行く。其は乙の妻が東京から腹の中に入れて來たおみやげの女だ。東京の糞尿と共に、此邊はよく東京のあらゆる下り物を頂戴する。すべての意味に於ての不淨取りをするのだ。此邊の村でも、風儀は決して惡くない。甲州街道から十丁とは離れて居ぬが、街道筋の其れと比べては、村は堅いと云つてよい。

男女の間も左程に紊れては居らぬ。然し他の不始末に對しては、概して大目である。だから疵物でもずん〳〵片づいて行く。尤も疵物は大抵貧しい者にやられる。潔癖は贅澤だ。貧しい者は、其樣な素生調に頓着しては居られぬ。金の二三十兩もつければ、懷胎の女でももらふ。もと誰の畑であつても、自分のものになればさつさと種を蒔く。先の蒔き殘りのものがあつても、仔細なしに自分のにして了ふ。種を蒔くに必しも Virgin Soil を要しない。要するに東京の尻を田舍が拭ふ。田舍でも金もちが吾儘をして、貧しい者が後尻を拭ふにきまつて居る。何處までも不淨取りが貧しい農の運命である。

神は一大農夫である。彼は一切の汚穢を捨てず、之を攝取し、之を利用する。神程吝嗇爺は無い。而して神程太腹の爺も無い。彼に於ては、一切の不潔は、生命を造る原料である。所謂不垢不淨、「神の潔めたるものを爾淨からずとするなかれ」一切のものは土に入りて淨まる。自然は一大淨化場である。自ら神心に叶ふ農の不淨

觀について、我等は學ぶ所なくてはならぬ。

生命は共通である。潔癖は吾儘者の鄙吝な高慢である。

美的百姓

彼は美的百姓である。彼の百姓は趣味の百姓で、生活の百姓では無い。然し趣味に生活する者の趣味の爲の仕事だから、生活の爲と云ふてもよい。

北米の大説教家ビーチアルは、曾て數塊の馬鈴薯を人に饗して曰くだ、此は吾輩の手作だ、而して一塊一弗はかゝつて居るのだ、折角食つてくれ玉へと。美的百姓は憚りながらビーチアル先生よりも上手だ。然し何事にも不熱心の彼には、到底那須野に稗を作つた乃木さん程の上手な百姓は出來ぬ。川柳氏歌うて曰く、釣れますか、などと文王傍へ寄り、と。美的百姓先生の百姓も、太公望の釣位なものだ。太公望は文王を釣り出した。美的百姓は趣味を掘り出さんとして手に豆をこさへる。

百姓として彼は終に落第である。彼は三升の蕎麥を蒔いて、二升の蕎麥を穫たこ

とがある。彼が蒔く種子は、不思議に地に入つて雪の如く消えて了ふ。彼が作る菜は多く苦い。彼が水瓜は九月彼岸前にならなければ食はれない。彼が大根は二股三股はまだしも、正月の注連飾の様に螺旋狀にひねくれ絡み合ふたのや、章魚の様な不思議なものを造る。彼の文章は格に入らぬが、彼の作る大根は往々藝術の三昧に入つて居る。

彼は仕事着にはだし足袋、戰爭にでも行く様な意氣込みで、甲斐々々しく畑に出る。少し働いて、大に汗を流す。鍬柄ついて畑の中に突立つた時は、天も見ろ、地も見ろ、人も見てくれ、吾れながら天晴見事の百姓振りだ。額の汗を拭きもあへずほうと一息入れる。曇つた空から冷やりと來て風が額を撫でる。此處が千兩だ、と大きな眼を細くして彼は悦に入る。向ふの畑で、本物の百姓が長柄の鍬で、後退りにサクを切るのを熟々眺めて、彼運動に現はるゝリズムが何とも云へぬ、と賞翫する。小雨ほと〳〵雲雀の歌まじり、眼もさむる綠の麥畑に紅帶の娘が白手拭を冠つ

て靜に働いて居るを見ては、歌か句にならぬものか、と色彩故に苦勞する。彼自身肥桶でも擔いで居る時、正銘の百姓が通りかゝれば、彼は得意である。農家のおかみに「お上手ですねえ」とお世辭でも云はれると、彼は頗る得意である。勞働最中に美裝した都人士女の訪問でも受けると、彼はます〳〵得意である。

稀に來る都人士には、彼の甲斐々々しい百姓姿を見て、一廉其道の巧者になつたと思ふ者もあらう。村の者は最早彼の正體を看破して居る。田圃向ふのお琴婆さんの曰くだ、旦那は外にお職がおありなすつて、お錢は土用干なさる程おありなさるから、と。一度百圓札の土用干でもしたいものと思ふが、兎に角外にお職がおあんなさる事は、彼自身欺く事が出來ぬ。彼は一度だつて農事講習會に出たことは無い。

美的百姓の家は、東京から唯三里。東の方を望むと、目黑の火藥製造所や澁谷發電所の煙が見える。風向きでは午砲も聞こえる。東京の午砲を聞いたあとで、直ぐ

横濱の午砲を聞く。闇い夜は、東京の空も横濱の空も、火光が紅く空に反射して見える。東南は都會の風が吹く。北は武藏野である。西は武相それから甲州の山が見える。西北は野の風、山の風が吹く。彼の書院は東京に向いて居る。彼の母屋の座敷は横濱に向いて居る。彼の好んで讀書し文章を書く廊下の硝子窓は、甲州の山に向ふて居る。彼の氣は彼の住居の方向の如く、彼方にも牽かれ、此方にも牽かれる。

彼は昔耶蘇教傳道師見習の眞似をした。英語讀本の教師の眞似もした。新聞雜誌記者の眞似もした。漁師の眞似もした。今は百姓の眞似をして居る。

眞似は到底本物で無い。彼は終に美的百姓である。

過去帳から

墓　　地

墓守

一

彼は粕谷の墓守である。

彼が家の一番近い隣は墓場である。門から唯三十歩、南へ下ると最早墓地だ。誰が命じたのでもない、誰に頼まれたのでもないが、家の位置が彼を粕谷の墓守にした。

墓守と云つて、別に墓掃除するでもない。然し家が近くて便利なので、春秋の彼岸に墓參に來る者が、線香の火を借りに寄つたり、水を汲みに寄つたりする。彼の庭園には多少の草花を栽培して置く。花の盛季は、大抵農繁の季節に相當するので、悠々と花見の案内する氣にもなれず、無論見に來る者も無い。然し村内に不幸があ

つた場合には、必庭園の花を折つて弔儀に行く。少し念を入れる場合には、花環などを拵へて行く。

墓守のついでに、墓場を奇麗にして、花でも植ゑて置かうかと思ふが、それでは皆が墓參に自家の花を手折つて來ても引立たなくなる。平生草を茂らして、春秋の彼岸や盆に墓掃除に來るのも、農家らしくてよい。墓地があまりにキチンとして居るのも、好惡である。と思ふので、一向構はずに置く。然し整理熱は田舍に及び、彼の村人も墓地を擴張整頓するさうで、此程周圍の雜木を切り倒し、共有の小杉林を拓いてしまふた。いまに櫻の生牆を遠らし、櫻でも植ゑて奇麗にすると云ふて居る。惜しい事だ。

二

彼は墓地が好きである。東京に居た頃は、よく青山墓地へ本を讀みに夢を見に往

つた。粕谷の墓地近くに卜居した時、墓が近くて御氣味が惡ふございましやうと村人が挨拶したが、彼は滅多な活人の隣より墓地を隣に持つことが寧嬉しかつた。誰も胸の中に可なり澤山の墓を有つて居る。眼にこそ見えね、我等は夥しい幽靈の中に住むで居る。否、我等自身が誰かの幽靈かも知れぬ。何も墓地を氣味惡がるにも當らない。

墓地は約一反餘、東西に長く、背は雜木林、南は細い里道から一段低い畑田圃。入口は西にあつて、墓は||||形に並んで居る。古い處で寛文元祿位。銀閣寺義政時代の寶德のが唯一つあるが、此は今一つはりがねで結はへた二つに破れた秩父青石の板碑と共に、他所から持つて來たのである。以前小さな閻魔堂があつたが、乞食の焚火から燒けてしまひ、今は唯石刻の奪衣婆ばかり片膝立てゝ凄い顏をして居る。頰杖をついて居る幾基の靜思菩薩、一隅にずらりと並んだにこ〳〵顏の六地藏や、春秋の彼岸に紅いべゝを子を亡くした親が着せまつる子育地藏、其等が「長十

山、三國の峰の松風吹きはらふ國土にまぢる松風の音」だの、上に梵字を書いて「爰追福者爲蛇蟲之靈發菩提也」だのと書いた古い新しいさま〳〵の卒塔婆と共に、寂しい賑やかさを作つて居る。植ゑた木には、櫨や寒中から咲く赤椿など。百年以上の百日紅があつたのは、村の飲代に植木屋に賣られ、植木屋から粕谷の墓守に賣られた。餘は在來の雜木である。春はすみれ、蒲公英が何時の間にか默つて咲いて居る。夏は白い山百合が香る。蛇が墓石の間を縫ふてのたくる。秋には自然生の秋明菊が咲く。冬は南向きの日暖かに風も來ぬので、隣の墓守がよくやつて來ては、乾いた落葉を踏んで、其處に日なたぼこりをしながら、取りとめもない空想に耽る。

三

田舍でも人が死ぬ。彼が村の人になつてから六年間に、唯二十七戸の小村で、此

墓場にばかり葬式の八つもした。多くは爺さん婆さんだが、中には二八の少女も、また傷い氣の子供もあつた。

ある爺さんは八十餘で、死ぬる二日前まで野ら仕事をして、ぽつくり往生した。羨ましい死に樣である。ある婆さんは、八十餘で、もとは大分難義もしたものだが辛抱しぬいて本家分家それ〳〵繁昌し、孫曾孫大勢持つて居た。ある時分家に遊びに來て歸途、墓守が緣側に腰かけて、納屋大小家幾棟か有つて居ることを誇つたりしたが、杖を忘れて歸つて了ふた。其杖は今カタミになつて、墓守が家の浴室の心張棒になつて居る。ある爺さんは、困つた事には手が長くなる癖があつた。さまで貧でもないが、よく近所のものを盜むだ。野菜物を採る。甘藷を掘る。下肥を汲む。木の苗を盜む。近所の事ではあり、病氣と皆が承知して居るので、表沙汰にはならなかつたが、一同困り者にして居た。杉苗でもとられると、見附次第默つて持戻つたりする者もあつた。此れから汁の實なぞがなくならずにようござんしやう、と葬

式の時ある律義な若者が笑つた。さる爺さんは、齡は其様なでもなかつたが、若い時の苦勞で腰が悉皆傴むで居た。きかぬ氣の爺さんで、死ぬるまで儞に世話はかけぬと婆さんに云ひ云ひしたが、果して何人の介抱も待たず立派に一人で往生した。其以前、墓守が家の瓜畑に誰やら入込むでごそ／＼やつて居るので、誰かと思ふたら、此爺さんが親切に瓜の心をとめてくれて居たのであつた。よく楢茸の初物だの何だの採つては、味噌漉しに入れて持つて來てくれた。時には親切に困ることもあつた。ある時畑の畔の草を苅つてやると云つて鎌を提げて來た。其畑の畔には萱薄が面白く穗に出て、捨て難い風致の徑なので其處だけわざ／＼草を苅らずに置いたのであつた。其れを爺さんが苅つてやると云ふ。頭を掻いて斷はると、親切を無にすると云はんばかり爺さんむつとして歸つて往つたこともある。最早楢茸が出ても、味噌漉しかゝへて、「今日は」と來る腰の曲つた人は無い。

四

燻炭肥料と云ふ事が一時はやつて、芥屑を燻燒する爲に、大きな深い穴が此處其處に掘られた。其穴の傍で子を負つた十歳の女兒と六歳になる女兒が遊むで居たが、誤つて二人共穴に落ちた。出ることは出たが、六になる方は大火傷をした。一家殘らず遠くの野らへ出たあとなので、泣き聲を聞きつける者もなく、十歳になる女兒は叱られるが恐さに、火傷した女兒を窃と自家へ連れて往つて、火傷部に襤褸を被せて、其まゝにして置いた。醫師が來た頃は、最早手後れになつて居た。墓守が見舞に往つて見ると、煎餅の袋なぞ枕頭に置いて、アアンゝゝゝ幽かな聲でうめいて居た。二三日すると、其父なる人が眼に涙を浮めて、牛乳屋が來たら最早牛乳は不用と云ふてくれと賴みに來た。亡くなつたのである。此邊では、墓守の家か、博徒の親分か、重病人でなければ牛乳など飲む者は無い。火傷した女兒は、瀕死の怪我

で貴い牛乳を飲まされたのである。父なる人は神酒に醉ふて、赤い顔をして頭を掉る癖がある人である。妙に不幸な家で、先にも五六歳の女兒が行方不明で大騒ぎをした後、品川堀から死骸になつて上つたことがある。火傷した女兒の低いうめき聲と、其父の涙に霑むだ眼は、いつまでも耳に目にくつついて居る。

牛乳と云へば、墓守の家から其家へとしばらく廻つて居た配達が、最早其方へは往かなくなつた。牛乳をのむで居た娘は、五月の初に亡くなつたのである。墓守夫婦が村の人になつた時、彼女は十一であつた。體を二ッ折にしてガックリお辭儀するしやくんだ顔の娘を、墓守夫婦は何時となく可愛がつた。九人の兄弟姉妹の眞中で、あまり可愛がられる方ではなかつた。可愛がられる其妹は、姉の事を云つて、「おやすさんな叱られるクセがある」と云つた。やゝ陰氣な、然し情愛の深い娘だつた。墓守の家に東京から女の子が遊びに來ると、「久ちやん」「お安さん」とよく一緒に遊むだものだ。彼女も連れて玉川に遊びに往つたら、玉川電車で歸る東京の娘

を見送つて「別れるのはつらい」と黯然として云つた。彼女は妙に不幸な子であつた。ある時村の小學校の運動會で饌立競走で一着になり、名を呼ばれて褒美を貰つたあとで、饌立の法が違つて居ると女教員から苦情が出て、あらためて呼び出され、褒美を取り戻された。姉が嫁したので、小學校も高等を終へずに下り、母の手助をした。間もなく彼女は肺が弱くなつた。成る可く家の厄介になるまいと、醫者にも見せず、熟蠶を拾つたり繭を搔いたり自身働いて溜めた巾着の錢で、賣藥を買つたりして飲むだ。

去る三月の事、ある午後墓守一家が門前にぶらついて居ると、墓地の方から娘が來る。彼女であつた。「あゝお安さん」と聲をかけつゝ、顔を見て喫驚した。其處の墓地の石の下から出て來たかと思はるゝ樣な凄い黯い顔をして居る。「あゝ氣分が惡いのですね、早く歸つてお休み」と妻が云ふた。氣分が惡くて裁縫の稽古から歸つて來たのであつた。彼女は其れつきり元氣には復さなかつた。彼女の家では牛乳を

とつてのませた。彼女の兄は東京に下肥引きに往つた歸りに肴を買つて來ては食はした。然し彼女は日々衰へた。遠慮勝の彼女は親兄弟にも遠慮した。死ぬる二三日前、彼女はぶらりと起きて來て、産後の弱つた體で赤ん坊を見て居る母の背に立ち、わたしが赤ん坊を見て居るから阿母は少しお休みと云ふた。死ぬる前日は、父に負はれて屋敷内を廻つてもらつて喜んだ。其翌日も父は負つて出た。父が唯一房咲いた藤の花を折つてやつたら、彼女は枕頭の土瓶に挿して眺めて喜んだ。其夜彼女は父を搖り起し、「わたしが快くなつたら如何でもして恩報じをするから、今夜は苦艱だから、濟まないが阿爺さん起きて居てお呉れ、阿母は赤ん坊や何かでくたびれきつて居るから」と云ふた。而して翌朝到頭息を引取つた。彼女は十六であつた。彼女の家は、神道禊教の信徒で、葬式も神道であつた。兄の二人、弟の一人と、姉婿が棺側に附いて、最早墓守夫妻が其亡くなつた姉をはじめて識つた頃の年頃になつた彼女の妹が、紫の袴をはいて位牌を持つた。六十前後の老衰した神官が拍手を打

つて、「下田安子の命が千代の住家と云々」と祭詞を讀むだ。快くなつたら姉の嫁した家へ遊びに行くと云つて、彼女は晴衣を拵へてもらつて喜んで居たが、到頭其れを着る機會もなかつた。棺の上には銘仙の袷が覆ふてあつた。其棺の小さゝを見た時、十六と云ふ彼女の本當にまだ小供であつたことを思ふた。赤土を盛つた墓の前には、彼女が常用の膳の上に飯を盛つた茶碗、清水を盈たした湯呑なぞならべてあつた。墓が近いので、彼女の家の者はよく墓參に來た。墓守の家の女兒も時々園の花を折つて往つて墓に挿した。三年前砲兵にとられた彼女の二番目の兄は、此の春肩から腹にかけて砲車に轢かれ、已に危い一命を繩にとりとめて先日めでたく除隊になつて歸つた。「お安さんは君の身代りに死んだのだ、懇に弔ふて遣り玉へ」墓守は斯く其の若者に云ふた。

五

墓地が狹いので、新しい棺は大抵古い骨の上に葬る。先年村での舊家の老母を葬る日、墓守がぶらりと墓地に往つて見たら、墓掘り役の野ら番の一人が掘り出した古い髑髏を見せて、

「御覽なさい、頰の格好が斯う仁左衞門さんに肖てるじやありませんか。先祖つてえものは、矢張り爭はれないもんですな」

と云ふた。泥まみれの其の髑髏は、成程頰骨の張り方が、當主の仁左衞門さんそつくりであつた。土から生れて土に働く土の精、土の化物とも云ふべき農家の人は、死んで土になる事を自然の約束として少しも怪むことを爲ない。ある婆さんを葬る時、村での豪家と立てられる伊三郎さんが、野ら番の一人でさつさと赤土を掘りながら、ホトケの息子の一人に向ひ、

「でも好い時だつたな、來月になると本當に忙しくてやりきれンからナ」と極めて平氣で云ふて居た。息子も平氣で頷いて居た。死人の手でも借りたい程忙しい六七

月に葬式があると、事である。村の迷惑になるので、小供の葬式は、成るべくこつそりする。ある夜、墓守が外から歸つて來ると、墓地に一點の火光が見える。やゝ紅い火である。立とまつてぢいと見て居た彼は、突と墓地に入つた。其は提灯の火であつた。黑い影が二つ立つて居る。近づいて、村の甲乙であることを知つた。側に墓穴が掘つてある。「誰か亡くなられたのですか」と墓守が問ふた。「えゝ、小さいのが」と一人が答へた。彼等は夜陰に墓を掘り終へ、小さな棺が來るのを待つて居たのである。

六

古家を買つて建てた墓守が二つの書院は、宮の樣だ、寺の樣だ、と人が云ふ。外から眺めると、成程某院とか、某庵とか云ひさうな風をして居る。墓地が近いので、ます〳〵寺らしい。演習に來た兵士の一人が、青山街道から望み見て、「あゝお寺が

出來たな」と云つた。居は氣を移すで、寺の様な家に住めば、粕谷の墓守時には有髪の僧の氣もちがせぬでも無い。

然し此れが寺だとすれば、住持は恐ろしく悟の開けぬ、煩悩滿腹、貪瞋癡の三惡を立派に具足した腥坊主である。彼は好んで人を喰ふ。生きた人を喰ふ上に、亞刺比亞夜話にある「ゴウル」の様に墓を掘つて死人を喰ふ。彼は死人を喰ふが大好きである。

無論生命は共通である。生存は喰ひ合ひである。犧牲なしでは生きては行かれぬ。犧牲には、毎に良いものがなる。耶蘇は「吾は天より降れる活けるパンなり。吾肉は眞の喰物、吾血は眞の飲物」と云ふたが、實際良いものゝ肉を喰ひ血を飲んで我等は育つのである。粕谷の墓守、睡眠山無爲寺の住持も、想ひ來れば半生に數限りなき人を殺し、今も殺しつゝある。人を殺して、猶飽かず、其の死體まで掘り出して喰ふ彼は、畜生道に墮したのではあるまいか。墓守實は死人喰ひの「ゴウル」なのではあるまいか。彼は曾て斯んな夢を見た。誰やら憤つて切腹した。彼ではなかつた様だ。無論去年の春の事だから、乃木さんでは無い。誰やら切腹すると、瞋恚の焔とでも云ふのか、割いた腹から一團のとろ〳〵した紅い火の球が墨黑の空に長い〳〵尾を曳いて飛んで、ある所に往つて鷄の嘴をした異形の人間に化つた。而して彼は其處に催ふされて居る宴會の席に加はつた。夢見る彼は、眼を擧げてずうと其席を見渡した。手足胴體は人間だが、顏は一個として人間の顏は無い。狼の頭、豹の頭、鯊の頭、蟒蛇の頭、蜥蜴の頭、鷲の頭、梟の頭、鰐の頭、――恐ろしい物の集會である。彼は上座の方を見た。其處には五分苅頭の色蒼ざめた乞食坊主が Preside して居る。其乞食坊主が手を擧げて相圖をすると、一同前なる高脚の盃を擧げた。而して恐ろしい聲を一齊にわッと揚げた。彼は冷汗に浸つて寤めた。惟ふに彼は夢に畜生道に墮ちたのである。現の中で生きた人を喰つたり、死んだ死骸を喰つたりばかりして居る彼が夢としては、ふさはしいものであらう。

彼は粕谷の墓守である。彼の住居は外から見てのお寺である。如何様なお寺にも過去帳がある。彼は彼の罪亡ぼしに、其の過去帳から彼の餌になつた二三亡者の名を寫して見よう。

綱島梁川君

明治四十年九月某の日、柄杓が井に落ちた。女中が錨を下ろして探がしたが、上らぬ。妻が代つて小一時間も骨折つたが、水底深く沈むだ柄杓は中々上らうともしない。最後に主人の彼が引受け、以前相模の海で鱚を釣つた手心で、錨索をとつた。偖熱心に錨を上げたり下げたりしたが、時々はコトリと手答はあつても、錨の四本の足の其何れにも柄杓はかゝらない。果ては肝癪を起して、井の底を引搔き廻すと、折角の清水を濁らすばかりで、肝腎の柄杓は一向上らぬ。上らぬとなるとます〳〵意地になつて、片手は錨、片手は井筒の縁をつかみ、井の上に伸しかゝつて不可見水底の柄杓と闘つて居ると、

「郵便が參りました」

と云つて、女中が一枚のはがきを持て來た。彼は舌打して錨を引上げ、其はがきを受取つた。裏をかへすと黒枠。誰かと思へば、綱島梁川君の訃であつた。

彼は其はがきを持つたまゝ、井戸傍を去つて母屋の縁に腰かけた。

* * * *

程明道の句に「道通天地有形外」と云ふのがある。梁川君の様な有象から無象に通ふ其「道」を不斷に歩いて居る人は、過去現在未來と三生を貫通して常住して居るので、死は單に此生態から彼生態に移つたと云ふに過ぎぬ。斯く思ふものゝ、死は矢張哀しい而して恐ろしい事實である。

彼は梁川君と此生に於て唯一回相見た。其は此春の四月十六日であつた。梁川君の名は久しく耳にして居た。其「見神の實驗」及び病間錄に收められた他の諸名篇を、彼は雜誌新人の紙上に愛讀し、敎へらるゝことが多かつた。木下尙江君がある日粕谷に遊びに來た時、梁川君の事を話し、「一度逢つて御覽なさい、あの病體に恐

入つた元氣」と云ふた。丁度四月十六日には、救世軍のブース大將歡迎會が東京座に開かるゝ筈で、彼も案内をうけて居たので、出京のついでに梁川君を訪ふことにしたのであつた。

肺患者には無慘な埃まじりの風が散り殘りの櫻の花を意地わるく吹きちぎる日の午後、彼は大久保余丁町の綱島家の格子戸をくゞつた。梁川先生發熱の虞あり、來訪諸君は長談を用捨されたく云々、と主治醫の書いた張札が格子戸に貼つてある。食事中との事で、しばらく薄暗い一室に待たされた。「自彊不息」と主人の囑によつて淸人か鮮人かの書いた額が掛つて居た。やがて案内されて、硝子戸になつて居る縁側傳ひに奥まつた一室に入つた。古い段通を敷いた六疊程の部屋、下を硝子戸の本棚にして金字の書卷のギッシリ詰まつた押入を背にして、蒲團の上に座つて居る淺黑い人が、丁寧に頭を下げて、吸ひ込む様なカスレ聲で初對面の挨拶をした。處女の様なつゝましさがある。たゞ其の人を見る黑い眸子の澄んで凝然と動かぬ處に、

意志の強い其性格が閃めく樣に思はれた。最初其カスレた聲を聞き苦しく思ひ、斯人に談話を强ふるの不躾を氣にして居た彼は、何時の間にかつり込まれて、悠々と話込むだ。話半に家の人が來客を報せられた。綱島君は名刺を見て、「あゝ丁度よい處だつた。御紹介しやうと思つて居ました」と云ふ。やがて勞働者の風をした人が一青年を連れて入つて來た。梁川君は、西田市太郎君と云ふて紹介し、「實地の經驗には、西田さんに學ぶ所が多い」と附け加へた。話は種々に涉つた。彼は聖書に顯れた耶蘇基督について不滿と思ふ所は、と梁川君に問ふた。例せば實なき無花果を咀つた樣な、と彼は言を添へた。梁川君は「僕も丁度今其事を思ふて居たが、不滿と云ふ譯ではないが、耶蘇の一特色は其イラヒドイ所謂 Vehement な點にある」と答へた。話は菜食の事に移つて、彼は旅順閉塞に行く或船で、最後訣別の盃を擧ぐるに、生かして持つて來た鷄を料理しやうとしたが、誰云ひ出すともなく、鷄は生かして置かうじやアないかと、到頭其まゝにして置いた、と云ふ逸話を話した。梁

川君は首を傾げて聽いて居たが、「面白いな」と獨語した。一座の話は多端に涉つたが、要するに隨感隨話で、まとまつた事もなかつた。唯愉快に話し込むで思はず時を移し、二時間あまりにして西田君列と前後に席を立つた。

其れから其足で三崎町の東京座に往つて、舞臺裏で諸君のあとから彼もブース大將の手を握るの愉快を獲た。大將は肉體も見上ぐるばかりの清げな大男で、其手は昨年の夏握つたトルストイの手の樣に大きく溫であつた。午後には梁川君と語り、夜はブース大將の手を握る。四月十六日は彼にとつて喜ばしい一日であつた。嬉しいあまりに、大將の演說終つて喜捨金集めの帽が廻つた時、彼は思はず乏しい財布を倒にして了ふた。

其後梁川君とははがきの往復をしたり、回光錄を贈つてもらつたりしたきり、彼も田園の生活多忙になつて久しく打絕えて居た。そこで此訃は突然であつた。精神的に不朽な人は、肉體も例令其れが病體であつても猶不死の樣に思はれてならなか

つたのである。梁川君が死ぬ、其様な事はあまり彼の考には入つて居なかつた。一枚の黒枠のはがきは警策の如く彼が頭上に落ちた。「死ぬぞ」と其はがきは彼の耳もとに叫んだ。

＊　＊　＊　＊

梁川君の葬式は、秋雨の瀟々と降る日であつた。彼は高足駄をはいて、粕谷から本郷教會に往つた。教會は一ぱいであつた。やがて棺が舁き込まれた。草鞋ばきの西田君の姿も見えた。某嬢の獨唱も、先輩及友人諸氏の履歴弔詞の朗讀も、眞摯なものであつた。牧師が説教した。「美人の裸體は好い、然しこれに彩衣を被せると尙美しい。梁川は永遠の眞理を趣味滴る如き文章に述べた」などの語があつた。梁川、梁川がやゝ耳障りであつた。

彼は棺の後に跟いて雜司ヶ谷の墓地に往つた。葬式が終ると、何時の間にか車にのせられて綱島家に往つた。梁川君に親しい人が集つて居て、晩餐の饗があつた。

西田君、小田君、中桐君、水谷君等面識の人もあり、識らない方も多かつた。

新宿で電車を下りた。夜が深けて居る。雨は止むだが、路は田圃の様だ。彼は提灯もつけず、更らに路を擇ばず、ザブ〳〵泥水を渉つて歸つた。新宿から一里半も來た頃、眞闇な藪陰で眞黒な人影に行合ふた。彼方はずうと寄つて來て、顏をすりつける様にして彼を覗く。彼は膽を冷やした。

「君は誰だ？」

先方から聲をかけた。彼は住所姓名を名乘つた。而して「貴君は？」ときいた。

「刑事です。大分晩く御歸りですな」

八幡近くまで歸つて來ると、提灯ともして二三人下りて來た。彼の影を見て、提灯はとまつたが、透かして見て「福富さんだよ」と驚いた様な聲をして行き過ぎた。此は八幡山の人々であつた。先日八幡山及粕谷の若者と烏山の若者の間に喧嘩があつて、怪我人なぞ出來た。其のあとがいまだにごたごたして居るのだ。